JICA 海外協力隊向け実践ガイド［CROSSROADS］

クロスロード

JULY
2022
7

特 集

活動時のお悩み解消

課題別支援
LinkedInグループ徹底解剖

クロスロード

2022 JULY

Contents

表紙によせて

「キヲツケ！」「ヤスメ！」のかけ声に、集中する生徒たち。ボールを使って体を動かす楽しさや達成感を伝える授業の一コマです。みんな競争するのが大好き。でも、夢中になると履きなれていない靴を脱ぎ始めてしまう児童も……。島唯一の公立小中一貫校を卒業すると、ここ、ガッドゥ島を離れる子どもがほとんどなので、卒業までに生徒たちに会いに行きたいです。佐伯侑梨加さん（モルディブ／体育／2014年度3次隊・埼玉県出身）

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集 活動時のお悩み解消
6 課題別支援 LinkedInグループ徹底解剖

14 派遣国の横顔 エルサルバドル
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

20 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

22 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

24 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり＆アクティビティ

26 先輩隊員のシューカツ記

28 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

30 待ってます、あなたを！ ～各界からのエール

31 あの日、地球の、あの場所で。

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし

36 ウチのこだわり —OB・OGショップ 海外編

■国別索引

	掲載ページ
ウガンダ	22
エクアドル	2
エルサルバドル	16、17、18、19
ガーナ	21
サモア	22
ザンビア	22
ジンバブエ	26
セネガル	5
セルビア	31
ネパール	22
パプアニューギニア	36
ベナン	24
ブラジル	34
モルディブ	1
モロッコ	5
ラオス	4
ルワンダ	28
ヨルダン	5

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	4
村落開発普及員	18、21
コンピュータ技術	26
防災・災害対策	19
自動車整備	22
製材	36
日本語教育	5
日本語教師	5
体育	1、17
小学校教育	2、24
理科教育	28
料理	34
養護	16
障害児・者支援	31

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
北海道	2
茨城県	21
群馬県	16
埼玉県	1
神奈川県	5、17
富山県	22
静岡県	28
滋賀県	4
奈良県	36
大阪府	24
兵庫県	18、19
高知県	26
福岡県	22、34
沖縄県	31

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

上：休み時間は子どもたちと日本のアニメや文化の話もよくしました（フローレスさん＝写真中央）。左：子どもたちが持っているのは、図形の角度を学ぶために手作りした扇形の教材

エクアドルの小学校で、教材を工夫して子どもたちが楽しめる算数授業を行いました

フローレス繭（まゆ）さん（旧姓：金平）（エクアドル／小学校教育／2014年度1次隊・北海道出身）

赤道直下にあるため、エクアドルは暑いイメージがあるかもしれません。しかし、任地のパスターサ県は標高が高く、過ごしやすい気候の地域でした。インディヘナと呼ばれる先住民族や、白人との混血のメスティソたちが暮らしていて、それぞれに貧富の差や教育格差がありました。私は現地の教育事務所に所属し、日替わりで五つの小学校を巡回して、算数教育の質向上のため、児童や教員への指導を行いました。

初めて小学校の算数授業を見学したとき、教科書が文字だらけでわかりづらく、授業では先生が一方的に話していると感じ、子どもたちが楽しく学べる授業を行うべきだと強く思いました。時計の読み方の学習用に、日本から時計型教材を取り寄せました。また、図形の角度を学ぶ授業では、ストローや折り紙で角度が変えられる扇形の教材を手作りしました。教材を手にした児童たちは、楽しんで算数に向き合うようになりました。先生たちに教え方の提案をすると、最初は「そんなに言うならマユがやればいい」と反発されたこともありました。でも、一緒に授業を進めていくなかで信頼関係が築け、先生たちの協力も得られるようになりました。

教員の仕事は勤務時間内に授業をすることと割り切っているのか、放課後に保護者が相談に来ても「明日にしてください」と断る先生もいました。また、ほとんどの先生が子どもたちのケンカに関与しませんでした。日本の先生がいろいろなことに関わり過ぎているのかと悩みもしましたが、私はなるべく子どもたちと関わりを持とうと思いました。休み時間にケンケンパや鬼ごっこなど、日本の遊びを一緒にすると、子どもたちはとても喜んでくれました。

Text＝村重真紀　写真提供＝フローレス繭さん

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Japan

ラオスの伝統工芸品をきっかけに国境を超えて“ふるさと”をつくる

濱野愛美（はまのまなみ）さん（旧姓 樋口（ひぐち））（ラオス／コミュニティ開発／ 2018年度3次隊-2021年度9次隊・滋賀県出身）

新卒でカンボジアでクッキーを販売する会社に就職しました。そこで商品開発に携わったことがきっかけでJICA海外協力隊に応募し、2019年1月から20年3月、21年9月から22年3月までラオスのビエンチャン県で活動しました。

ラオスでは以前から「ODOP（One District One Product：一村一品）運動」を導入し、各地域の特産品の製品開発、販路開拓などによる生計向上や地域活性を目指しています。活動自体は浸透していますが、消費者にとってODOP認証のメリットがわかりにくいこと、外国人向けに販売できるODOP認証商品が少ないことが課題でした。まずは市場や生産者の現状調査をしようと考えましたが、任地は交通網が整備されておらず、最初は移動手段もありませんでした。配属先の上司に「視察に連れていってほしい」と頼めば適当にあしらわれ、デスクで待機していれば「愛美は何しに来たの？」と言われる始末。ラオ語にも自信が持てず、つらい日々が続きました。

やっと視察に連れていってもらえたのは、赴任して2カ月半後のこと。視察した生産品のなかで特に私が心ひかれたのは「シン」と呼ばれる女性の民族衣装（筒形の巻きスカート）です。ラオスには50以上の民族が暮らし、各民族や地域ごとに伝統的な文様や染織技法が受け継がれています。支援したポンミー村ラオ族の「シン」を作る生産グループは、50代の女性が生産グループ長となり、130人もの織り手の女性たちを束ねていました。最初こそビジネスライクでしたが、私が毎日のように通い詰めると、「私の娘だ」と言ってかわいがってくれ、商品開発にも意欲的に取り組んでくれました。

新型コロナウイルス感染拡大による一時帰国中、不安を乗り越えられたのもこの〝ラオスのお母さん〟のおかげです。誰よりも頻繁に連絡をくれて、「会いたい」と言い続けてくれました。彼女の思いに応え、少しでも生活を支えたいという一心から起業することを決意し、ラオ語の習得にも励みました。

再赴任を経て、帰国後晴れて「theobaan（テオバーン）」という雑貨ブランドを立ち上げました。日本人の視点でラオスの布やシンを使った雑貨を商品化・販売し、広くその魅力を知ってもらおうと考えています。テオバーンとは、村のまわりや故郷という意味。日本人とラオス人がお互いの国に愛着を持ち、今いる場所をテオバーンだと思えるような活動をしていきたいと思います。

1 シンの柄や織り方は代々母から娘へ受け継がれている
2 ポンミー村のシンは絣（かすり）模様が特徴で、蛇神ナーガがモチーフ
3 シンを着用した、ラオスのお母さん（左）と濱野さん
4 シンは加工が難しく、商品化に苦労した
5 生産者たちと。食事や昼寝など、メインの活動外でも共に時間を過ごすことで信頼関係を深めた

Text＝秋山真由美　写真提供＝濱野愛美さん

from UAE

Web生け花展開催中 ―日・UAE外交関係樹立50周年記念

小林裕美（こばやしゆみ）さん（ヨルダン/日本語教師/2004年度1次隊_2006年度9次隊短期
モロッコ/日本語教師/2007年度0次隊SV_2010年度9次隊SV短期、日本語教育/2013年度4次隊SV
セネガル/日本語教師/2012年度9次隊SV短期・神奈川県出身）

2022年4月から、「いけばなアルモンデ『アブダビの空へ』」展を開催しています。20年12月にアラブ首長国連邦（以下、UAE）の首都アブダビに来て二つの大学の日本語教師を務める傍ら、趣味で生けた作品をウェブサイト上で展示しているもので、日本とUAEの外交関係樹立50周年を記念して個人的に行っています。

私が生け花を始めたのは、モロッコの協力隊員だったときの体験がきっかけです。日本語を教えている生徒から生け花のワークショップをしてほしいと言われ、生け花の経験がないまま見よう見まねで行いました。生徒たちが楽しんで生けてくれたとはいえ、生け花の基本も知らないままでは日本語学習者に対して申し訳ないと思い、帰国後に古流の先生について数年間習い、以来、趣味にしています。

UAEでも生け花をしようと初めは花屋へ行ったのですが、あまりの花材の少なさに失望し、「やっぱり砂漠の国で生け花は難しいかな」と諦めていました。

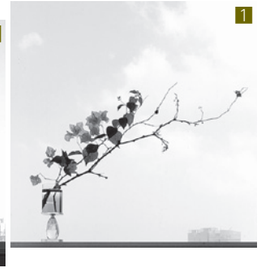
ところが、ある日、公園へ行くと、ブーゲンビリアの刈り込みをしていました。UAEの公園はお金をかけて常に管理されています。たくさんの切りくずがあり、そのなかの花をもらっていいかと庭師さんに尋ねると、「いいよ」と、さらに何本か長めに切って渡してくれました。

その庭師さんはアフガニスタン出身で、私が日本人と知ると、「私はナカムラを知っている！」と人道支援に尽くした故・中村哲（なかむらてつ）医師の名前を口にしました。驚くと共に、その頃はタリバンが国を席巻して避難民をたくさん出していた時期だったため、より心に響きました。そんな出会いで手にしたブーゲンビリアが特別なものに思え、持ち帰って大切に生けました。

その時に、「身の回りに〝あるもの〟で〝生け花をすればいい〟」と思い立ちました。日課の散歩のついでに枯れ枝を拾ったり、野草を摘んだり、刈り込み中の庭師さんから廃棄処分の草花を分けてもらったりして生け花を楽しみ、記録として写真にも残すようになりました。生け花は立体の空間表現ですが、写真で見ても伝わるように生け方を試行錯誤するようになりました。

新型コロナウイルスの影響で、赴任以来、大学はずっとオンライン授業です。授業で「私の趣味は生け花です」と学生に生け花の画像を紹介したところとても興味を持ってくれたため、作品をウェブサイト上にまとめて広く見てもらうことを思いつき、今回の記念展開催に至りました。

私は縁あってUAEにいて、いろいろな人々に支えられて生きています。そのことへの感謝と平和への願いを込めて、そして、外交関係樹立50周年にちなんで、アブダビで生けた50作品を選びました。さらに作品がたまったら入れ替えを行い、12月末まで展示します。素人ですが、皆さんに気軽にご覧いただければ嬉しく思います。



「いけばなアルモンデ『アブダビの空へ』」展
https://sites.google.com/view/ikebana-exhibition/

「いけばなアルモンデ『アブダビの空へ』」展の作品から。
1 ブーゲンビリアを使った「アブダビノソラへ」、
2 路傍のイネ科の植物を生けた「サバクノフネ」、
3 「コノキナンノキ」はナツメヤシの花を使った

Text＝工藤美和　写真提供＝小林裕美さん

活動時のお悩み解消

課題別支援 LinkedInグループ 徹底解剖

2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、協力隊員の一斉帰国が行われた。その後、再派遣を遂げた隊員や新規派遣される隊員は増えているものの、派遣国で現役の先輩隊員がいないケースは少なくない。感染症対策をしながらの活動が、思いも寄らない壁になることもあるだろう。そうした問題を解決すべく、青年海外協力隊事務局の課題業務・選考課が始めたのがLinkedIn（リンクトイン）だ。どんな取り組みで、どう活用すればいいのかを紹介する。

Text＝新海美保（P7-12）、ホシカワミナコ（本誌・P6）　写真提供＝ご登場いただいた各位

JICA海外協力隊の課題別支援LinkedInグループとは？

昨今のデジタルツールの導入やオンライン化を契機に、派遣前・中・後の隊員らがシームレスにつながる課題別支援LinkedInグループが立ち上がっている。設立に携わった青年海外協力隊事務局（以下、協力隊事務局）の澤田純子さんに聞いた。

青年海外協力隊事務局
課題業務・選考課 課長補佐
澤田純子（さわだじゅんこ）さん

PROFILE
1994年4月に国際協力機構入構。JICAメキシコ事務所勤務、デジタルトランスフォーメーションタスクなどを経て現職。

新型コロナウイルス感染症の影響で、JICAのデジタルトランスフォーメーション（DX※）の動きが加速し、世界約100拠点の関係者が円滑に仕事を進めるためのコミュニケーションツールの一つとしてLinkedIn（以下、リンクトイン）が導入されました。リンクトインは世界中で7・5億人以上に利用されている世界最大のビジネス特化型のSNSで、実名登録で学歴やキャリア情報などを開示するため、ほかのSNSに比べて投稿される情報の正確性が高いといわれています。JICAでは、開発途上国の人材を育てるJICA長期研修員や起業家支援のネットワークづくりでリンクトインを活用してきました。協力隊事務局もコロナ禍で派遣前研修の見直しを迫られるなか、2021年4月からリンクトインの運用を開始しました。

協力隊事務局が運営する課題別支援LinkedInグループの特徴は、協力隊の職種ごとにグループが構成されている点にあり、「課題別支援グループ」と呼んでいます。人数の多い職種を中心に16グループがあり、投稿内容は活動先の状況報告や言語・文化・習慣の情報共有などさまざまです（詳しくは8ページへ）。21年1次隊から本格導入し、新隊員すべてに案内を出しています。22年5月現在、リンクトイン参加者は508人。派遣前・中隊員の6割以上が参加し、帰国した隊員（以下、OV）や技術顧問などもメンバーです。グループを管理する協力隊事務局からの情報発信だけでなく、座談会や自主的な勉強会を開催し、各職種ならではの情報交換や悩み相談のツールとしても活用されています。

従来、派遣前には課題別派遣前訓練（旧技術補完研修、必要な場合のみ）と70日間の青年海外協力隊訓練所での訓練がありましたが、コロナ禍でオンデマンド型の自己学習と集合型の支援講座の二本柱に切り替えました。対面で議論しながら派遣先で必要な知識やノウハウを知る時間が減ってしまいましたが、それを補完する機能としても役割が期待できます。同じ職種の隊員が国や地域、隊次を超えて情報を共有し、現場での活動に生かすことが可能になっています。

コロナ禍で予定どおりの赴任がかなわず待機中の隊員、一時帰国して再赴任待ちの隊員、赴任中の隊員、そして任期を終えて帰国した隊員など多様な属性の隊員がいます。皆が有機的につながることで、派遣前の情報収集や帰国後のキャリア形成の実現をサポートします。将来的には、協力隊員の〝タレント名鑑〟をつくり、コアな人材の発掘・育成にもつなげたいと考えています。

グループの運用を始めて1年。まだ試行錯誤の最中ですが、派遣先で孤独を感じながら活動していた隊員が同じ悩みを持つ隊員と話したり、OVや技術顧問からアドバイスをもらったりしながら、派遣先での人間関係や活動が好転するきっかけになった事例も増えています。協力隊の職種は9部門190種類以上に上りますので、15職種以外の隊員も入れる「なんでも職種」のグループもあります。まだ参加していない現役隊員の皆さんにぜひ参加してほしいと思います。また、国内外で活躍するOVの皆さんも、それぞれの知見をシェアする場として活用してほしいと思います。

※デジタルトランスフォーメーション（DX）…デジタル技術を活用することで社会や生活をよい方向に変化させること。

こんな相談がありました！

職種別のグループだからこそ、活動上の悩みを投稿したり、オンライン座談会で話したりすると、複数の参加者から具体的に意見やアドバイスがもらえるといった利点がある。今までに技術顧問やOV、現役隊員が答えて解決した事例を教えてもらった。

事例1：看護系

カンボジアに派遣中の隊員が、派遣先の手術後のストーマ（排泄口）ケアの課題を共有。「今あるものでできる最善のケアや知識を提供したい」という投稿に対し、技術顧問や技術専門委員から詳細なアドバイスがあった。

事例2：コミュニティ開発

赴任して半年経過した隊員が「酒の商品化を手伝っているが、ふたがないという問題に直面している。何かいいアイデアはないか?」と投稿。OV 含めさまざまな人が多様な角度からアイデアを出し、活動の参考になった。

事例3：環境教育

ケニア派遣中隊員が、「200 名の生徒の前で 10 分講義せよと言われて困っている」と座談会で悩みを共有。OV から環境教育の捉え方やワークショップの計画の方法、テクニックなど多様なアイデアが出た。派遣前隊員からも「活動のイメージが持てた」「早く大勢の前で話したい」などの声が聞かれた。

事例4：日本語教育

かるた大会などの活動報告、ツールを使った課題添削の方法の紹介、国を超えた学習者間の交流会の呼びかけなどの投稿により、お互いに活動のヒントや必要な情報を得ている。

事例5：体育・スポーツ

オンライン座談会で、OV がファシリテーターとなり、それぞれの悩みをほかの人がポジティブな言葉に変換するワーク、本当にやりたいことは何かを考えるワークをやった。参加者からは前向きな気持ちになれたという感想が聞かれた。

体育

対　象：職種「体育」
登録数：隊員17人、OVなど5人
平均投稿数：4件/月
内　容：体育隊員の活動報告や意見交換、体育教育に関する専門的な知識の共有や意見交換、オンライン座談会の実施など。

大切なのは支え合う力。派遣国は違っても、多くの人とつながって、情報交換しましょう

太田哲平さん（グアテマラ/小学校教育/2013年度3次隊）

体育・スポーツ

対　象：職種「体育」と各スポーツ職種（他職種の参加も可）
登録数：隊員52人、OVなど15人
平均投稿数：11件/月
内　容：写真や動画による近況報告・活動事例紹介、定期的なオンライン座談会の開催など。

職種・スポーツ種目が異なっても、共通の話題や悩みがあるはずです。横のつながりから活動のヒントが生まれることを期待しています

太田哲平さん（グアテマラ/小学校教育/2013年度3次隊）

リハビリ

対　象：職種「理学療法士」「作業療法士」「言語聴覚士」（他職種の参加も可）
登録数：隊員21人、OVなど13人
平均投稿数：8件/月
内　容：関連職種のOVや技術顧問からの役立つ情報（書籍など）、参加者の自己紹介や活動報告。共有したお薦めの本『文化人類学の思考法』（世界思想社）。▸オンライン座談会記事はP12へ。

他職種の方でも気軽に情報交換できる場となっています。ぜひご参加ください

倉持百花さん

看護系

対　象：職種「看護師」「助産師」「保健師」「学校保健」のみ
登録数：隊員20人、OVなど24人
平均投稿数：8件/月
内　容：対象職種の隊員同士の活動報告や情報交換、ナレッジシェア（知識の共有）の場として機能している。例えば、多言語医療問診票、分娩介助関連の名称や資格一覧表などの情報交換があった。

隊員の皆さんの縦・横のつながりの構築を目指しています。気軽に参加してください

倉持百花さん

環境教育

対　象：環境教育に関心のある隊員は参加可
登録数：隊員32人、OVなど19人
平均投稿数：11.4件/月
内　容：派遣中隊員の活動報告や悩みの共有、オンライン座談会の実施。コンポスト写真の共有や、ごみ置き場の写真投稿リレーなど。

環境教育はテーマが幅広く正解がない。だからこそ経験や事例をシェアしましょう

澤田純子さん

障害児・者支援

対　象：障害児・者支援に関心のある隊員は参加可
登録数：隊員30人、OVなど4人
平均投稿数：3件/月
内　容：青年海外協力隊事務局や障害児・者支援の技術顧問からの障害者支援に関する情報提供（オンライン座談会含む）など。

どの職種の方も参加可能です。障害者支援に関心のある方はぜひご参加ください

佐高宏美さん（ペルー/観光/2008年度2次隊）

日本語教育

対　象：職種「日本語教育」
登録数：隊員30人、OVなど9人
平均投稿数：11件/月
内　容：派遣中の隊員や特別登録者による活動紹介、海外の日本語教育や国内の多文化共生への取組に関する情報共有、オンライン座談会の実施など。

皆さんからのオンライン座談会への話題提供をお待ちしています。国・隊次・ステイタスを超えて、情報共有や悩み相談ができるグループにしましょう

星井直子さん（タイ/日本語教育/1995年度3次隊）

栄養士、家政・生活改善、料理

対　象：職種「栄養士」「家政・生活改善」「料理」（他職種の参加も可）
登録数：隊員21人、OVなど13人
平均投稿数：8件/月
内　容：技術顧問やOVネットワークと連携。対象職種の隊員に呼びかけ、オンライン座談会の実施。▸ オンライン座談会記事はP13へ。

栄養に関する活動に携わる方や内容に関心のある方は、誰でも参加可能です

倉持百花さん

コミュニティ開発

対　象：職種「コミュニティ開発」（他職種の参加も可）
登録数：隊員47人、OVなど15人
平均投稿数：15件/月
内　容：コミュニティ開発隊員を中心に、関係する職種も参加できる。オンライン座談会の開催や任地の様子や活動の悩みの投稿など。

まずは気軽に投稿し、座談会に参加してください

丸尾大輔さん（カメルーン／コミュニティ開発／2014年度2次隊）

IT

対　象：IT関連職種「PCインストラクター」「コンピュータ技術」（他職種の参加も可）
登録数：隊員18人、OVなど21人
平均投稿数：8.2件/月
内　容：IT関連の職種で活動する現役隊員やOVの情報交換の場。過去のIT隊員が作った教材サイトの紹介なども。

気軽に情報交換、意見交換ができる場所にしていきたいです

麻野英二さん（コロンビア/土壌・肥料/1995年度1次隊）

小学校教育

対　象：職種「小学校教育」のみ
登録数：隊員75人、OVなど9人
平均投稿数：4件/月
内　容：派遣中隊員の近況報告や青年海外協力隊事務局からの職種に関する情報提供（オンライン座談会含む）など。

隊員同士で投稿し合うグループを目指しています。一緒に盛り上げましょう

佐高宏美さん（ペルー/観光/2008年度2次隊）

幼児教育

対　象：職種「幼児教育」（他職種の参加も可）
登録数：隊員15人、OVなど12人
平均投稿数：4件/月
内　容：対象職種の現役隊員やOVによる動画アップ、オンライン定例会の実施など。

定期的に座談会や定例会を実施しています。幼児教育に関心のある方はぜひご参加ください

倉持百花さん

なんでも職種

対　象：希少職種（現在グループがある職種の方も参加可）
登録数：隊員44人、OVなど15人
平均投稿数：10件/月
内　容：15グループに入らない職種の隊員を対象としたグループ。共通の派遣国や職種の隊員らの隊次を超えたつながりを目指す。

任地で孤独を感じていませんか？当グループで同じ派遣国や職種の人を見つけてください

小杉尚子さん（ザンビア／理数科教師／2002年度2次隊）

数学教育・理科教育

対　象：職種「数学教育」「理科教育」（他職種も可）
登録数：隊員28人、OVなど4人
平均投稿数：11件/月
内　容：派遣前の自己紹介・訓練の様子の共有、理数科教育に関するJICAの取組の紹介、オンライン座談会の実施など。

派遣前だけでなく派遣後も、実験のアイデアや自作教材、任地の様子、授業に関する相談など、ぜひ投稿してください

星井直子さん（タイ/日本語教育/1995年度3次隊）

農業

対　象：農業に関心のある隊員すべて
登録数：隊員19人、OVなど33人
平均投稿数：15件/月
内　容：対象職種に限らず、農業に関心のある現役隊員やOVに向け、青年海外協力隊事務局からの情報発信、オンライン座談会の実施など。

農業隊員だけでなく、家庭菜園や養鶏を始めたい方なども大歓迎です

本田哲也さん（ウガンダ/村落開発普及員/2002年度1次隊）

青少年活動

対　象：職種「青少年活動」のみ
登録数：隊員39人、OVなど11人
平均投稿数：2.7件/月
内　容：対象職種の現役隊員やOVに向け、青年海外協力隊事務局からの情報発信、オンライン座談会の実施など。▸オンライン座談会記事はP10-11へ。

隊員発信の座談会を定期的にシリーズ化したいです

内藤優和さん

課題別支援 LinkedIn グループ

現在稼働している16グループの担当者（青年海外協力隊事務局　課題業務・選考課）に、各グループの特色や、グループ内で紹介された書籍や教材の一部を紹介してもらった。（登録人数はいずれも2022年5月時点）

より大きなネットワークができる オンライン座談会

課題別支援LinkedInグループのスピンオフ企画として、リンクトインに参加していない人も含めたオンライン座談会が開催されている。どんなテーマで行われているのか、三つのグループの事例を紹介する。

CASE 1
青少年活動 × 座談会

テーマは「子どもの人権」葛藤をシェアし、原点に立ち返る

オンライン座談会の様子

「青少年活動」職種のグループでは2022年3月、「青少年活動と子どもの人権」をテーマにオンライン座談会が開催され、主にケニアに派遣中の現役隊員9人とOV4人を含む16人が参加した。

「体罰は必要か?」をテーマに意見交換

土曜日の日本時間午後5時。オンライン上で開催された座談会では、「青少年活動と子どもの人権」がテーマとなった。このテーマを提案したのは、2021年からケニアの児童拘置所に配属されている現役隊員だ。活動のなかで、現地の職員が棒を使って子どもに体罰をする様子に出くわすことが何度となくあった。子どもの人権侵害にあたるのではないかと感じたが、日本とケニアの文化の相違を理由に子どもへの体罰を正当化されてしまうことに葛藤を抱えていた。これを聞いたほかの派遣中の隊員たちからも、自身の配属先でしつけと称した体罰の事例があると報告があった。

座談会では、過去に同じような施設で働いた経験のあるOVが、理解のある職員を巻き込んで組織全体で体罰を減らした事例を伝えたり、職員に対する研修会を実施したこと、また意見が異なる人との向き合い方などについて自身の経験を交えて伝えた。

こうした現役隊員やOVの話を受け、青少年活動職種の技術顧問を務める藤岡孝志さんは、「職員と隊員が一緒になって子どもたちと関わり、体罰がなくても子どもたちの行動が変わっていく姿勢を見せていくことが大切。目の前の活動現場においてどこが変化しうるかを見極め、子ども中心の考え方を根幹に据えながら周囲の幸せを考えることが重要です」と語った。

協力隊の職種のなかでも幅広い領域を扱う「青少年活動」は、家庭や学校教育では対応が難しい内容が活動の対象となることが多い。座談会は最終的に「青少年活動のアイデンティティとは何か」という深い話題にまで広がっていき、参加した隊員からは「オンライン座談会に参加してよかった」「コロナ禍でほかの隊員と話す機会が少なく、各地で活動している隊員と話せて心強いと感じた」「これをきっかけにリンクトインを定期的に活用したい」といったコメントが寄せられた。

座談会は開催日時やテーマの工夫も必要

この座談会を企画した青年海外協力隊事務局課題業務・選考課の内藤優和さん（8ページ参照）は、現役隊員に向け、関心のあるテーマを聞くだけでなく、開催日時についても事前にヒアリングを行ったという。

「今回は、オンライン座談会を開催した3月の時点で青少年活動職種の隊員が最も多く派遣されていたケニアの隊員を主な対象にしました。隊員は世界中にいますから、今後は国やテーマを変えた形の開催も模索していこうと考えています。現役隊員の派遣先での悩みの解決につなげていけたらいいですね」

藤岡さんは、「青少年活動の活動地域は学校から少年院や孤児院まで多岐にわたるため、隊員間の情報共有は重要」と話す。同職種ではリンクトイングループが始まったことで、情報発信や相互交流が活発になり、現役隊員も自由に語りやすい場になっている。

「派遣中の隊員の対話は派遣前の隊員研修のブラッシュアップにつながり、OVとの会話は帰国後のキャリアを考えるうえで有意義です。今、日本でも、子どもや若者を尊重しそれぞれの状況に応じたサポートの必要性が叫ばれています。各国・地域の将来を担う青少年の健全育成を目指す職種『青少年活動』の隊員として、常に問題意識を持って、さまざまな課題に取り組んでいただくと嬉しいです」（藤岡さん）

同グループでは、これからも隊員のニーズに合わせて多様なテーマを取り上げていく予定だ。参加者からもアイデアを募集している。

ケニア・カムガ村の小学6年生の授業風景（写真提供：佐藤浩治/JICA）

ケニア・ジョモ・ケニヤッタ農工大学を横切る地元の小学生（写真提供：久野真一/JICA）

「青少年活動」という職種について自由に語り合いましょう。ぜひ隊員だけでなくOVも参加してたくさんのアイデアを寄せてください

多くの隊員はこれまで派遣先の課題に対して一人で向き合わなければならず、強いストレスにさらされてきました。座談会を通じて隊員一人ひとりの声を拾えるようになったことは、隊員にとってもJICAにとっても大きな意味があります

藤岡孝志（ふじおかたかし）さん
JICA海外協力隊技術顧問
（青少年活動）

人間関係ができていないと活動全体がうまくいかず、負のスパイラルに陥ってしまうことがあります。座談会を通して悩みを分かち合い、気持ちに余裕ができれば、活動が前に進むこともあると思います

座談会に参加したOV
淡路侑太（あわじゆうた）さん
（ケニア／青少年活動／ 2019年度1次隊）

隊員が悩みを相談したり情報を共有し合ったりする場として、各地に隊員連絡所（ドミトリー）がありましたが、コロナ禍で多くが閉鎖されています。オンライン座談会はその代替手段としても、とても意義のある取り組みだと思います

座談会に参加したOV
黒田篤槻（くろだあつき）さん
（ケニア／青少年活動／ 2017年度3次隊）

CASE 2
リハビリ × 座談会

OV会との連携を通じて隊員の能力強化につなげる

リハビリ職種オンライン座談会は、2022年1月、派遣前・中の隊員9人を含む14人に、JOCVリハビリテーションネットワーク代表の小泉裕一さんも参加して実施した。

「派遣後3カ月ほどすると生活に慣れてくるものの、カウンターパートとの関係に悩み始める人が多いのではないか」。座談会で話題を提供したのは、新型コロナウイルス感染拡大により、任期途中でウズベキスタンからの帰国を余儀なくされた理学療法士の隊員。「2年間で成果を出さなければならない」という焦りから、カウンターパートに意見をして対立した時期があったが、配属先以外に視野を広げ、〝自分が変わる〟を意識したことで、徐々に関係が改善していったと報告した。そして、配属先との関係性に悩む現役隊員に対し、経験談を交えながら同じ目線で活動する基本姿勢に立ち返る大切さも伝えた。

ほかに、言語聴覚士としてマラウイで活動中の隊員は「手話のスピードが早く現地語交じりの会話についていけない」と悩みを共有。あるOVは「専門用語や現地語などの語彙（ごい）は隊員経験者から事前に情報を入手するとよい。また文字に残しておいてあとで調べたり、現地の人と積極的につながってフォローしてもらうことで改善できることもある」とアドバイスした。

このほか、コロナ禍でのコミュニケーション不足や派遣国での理学療法士の認知度の低さ、2年間で成果を残す難しさなど、参加者それぞれが抱える悩みや葛藤をシェアし、隊員やOV、技術顧問などが有益な情報や励ましの言葉を伝えた。参加した現役隊員は「先輩隊員から具体的な解決方法を教えてもらえた。活動に生かしたい」「同じ職種のつながりができ、モチベーションが向上した」と感想を語った。

オンライン座談会の様子

リハビリ職種グループのリンクトインでは、JOCVリハビリテーションネットワーク代表の小泉裕一さんをはじめ、OVも積極的に投稿していて参加者もなじみがあるため、座談会は盛り上がりを見せた。ファシリテーター役の小泉さんが隊員の悩みや思いを引き出す役割を果たし、参加者全員が発言した。コメンテーターとしてOVも多方面からアドバイスした。

技術顧問の渡邊雅行さんは、「これまで技術顧問への相談などはメールでしたが、リンクトインのほうが気軽に相談できるのではないでしょうか」と話す。同グループでは、参加者が日本で行ってきた経験や派遣国への思い、趣味や特技などを投稿しながら、参加者間の親密な関係づくりに役立てているという。「患者や利用者の個人情報保護の視点から、業務に関する内容はまだ少ないですが、国際協力の主要なキーワードや日本のリハビリテーション職種に関するトレンドなども発信していきます」。

CASE 3
栄養士、家政・生活改善、料理 × 座談会

座談会を通じて見えた新しい国際協力のあり方

栄養士、家政・生活改善、料理の3職種合同のオンライン座談会が、2022年3月、青年海外協力隊栄養士ネットワークとコラボして実施され、派遣前・中の隊員6人を含む15人が参加した。

3職種合同のオンライン座談会は、かつて栄養士の職種でコスタリカに派遣された隊員の経験談の共有から始まった。地方の診療所に赴任したが、派遣先の理学療法士や連携する予定だった同期の隊員が不在になるなど、要請内容とは異なる状況を前に当初は戸惑った。しかし、プライベートの時間を利用して行った日本料理を紹介する取り組みが、配属先の栄養改善講習会の盛り上がりにつながった。「協力隊は思わぬことから活動の広がりを見せる。何事も楽しんで」と、派遣中の隊員にメッセージを送った。

また、派遣前の隊員や派遣中の隊員から、調理実習をうまく実施する方法やカウンターパートがいないときに協力者を増やすコツなどさまざまな悩みが共有され、OVから「各地域のキーパーソンを見つけて仲良くなるとよい」「協力者は配属先にいるとは限らない」といったアドバイスがあった。参加した隊員は、「先輩隊員の声を聞いて安心した」「これからいろいろな課題に直面すると思うが、支えてくださる人がいるとわかって心強い」「これからも定期的に座談会をやってほしい」といった声が聞かれた。

オンライン座談会の様子

座談会では、技術顧問の藤掛洋子さんに加え、ファシリテーターとして青年海外協力隊栄養士ネットワーク（以下、栄養士OV会）代表の氏家真梨さんも参加した。「3職種合同で、職種を限定せずに食・栄養を中心とした意見交換ができたことは新鮮でした。国や職種が違っても共通の話題や課題は多く存在するため、今後はテーマを絞り、関連する多様な職種が集まる座談会も面白そうです」。

栄養士OV会では活動中の隊員が困っていたら少しでも役に立ちたいと考え、これまでもさまざまなサポートを行ってきた。そのため、オンライン座談会はOVの経験を現役隊員に役立ててもらうためにも、有意義だったようだ。「OV会では、その職種の支援だけにとどまらず、専門性を生かした隊員との関わりを大切にしていきたいと考えています。コロナ禍で制約が続くなか、再び隊員派遣が始まり、OV会としても新たなスタートを切った気持ちです」と笑顔を見せた。

一方、藤掛さんは、「座談会を通じてこれまでなかなかつながることのできなかった隊員やOVが集い、意見を交わし、リンクトインを通して継続的な関係ができています。現地からの情報をタイムリーに得られるようになったことは大きな意義があります。今後もSNSを通して、新しい国際協力のあり方を模索すると共に、家政系・栄養系の隊員たちと活発な意見交換をしたい」と語った。

座談会に参加すれば世界中の同志とつながれます。孤独を感じている人もぜひ参加を

コロナ禍という社会情勢のなかでも、志を高く持ち、工夫して現地の方と関係性を築いている姿に心を打たれました

現在はまだ技術顧問や事務局スタッフからの投稿や返信が多いですが、隊員や OV による情報交換の場になればと思います

配属先で戸惑ったこと、経験したことのない疾患や障害、現地の障害者の工夫や施設の行事など、自由に情報共有してください

JOCVリハビリテーションネットワークとは
理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を中心としたOV会。情報共有、会報の発行や協力隊まつりなどのイベント参加、隊員向け勉強会の開催、帰国後のキャリア支援などを実施。会員募集中！（問い合わせ）▸ jocvrehabnetwork@gmail.com

JOCVリハビリテーションネットワーク代表
小泉裕一（こいずみゆういち）さん
（モンゴル／理学療法士／ 2012年度1次隊）

渡邊雅行（わたなべまさゆき）さん
JICA海外協力隊
技術顧問
（リハビリテーション）

世界各地の隊員とつながるには、時差の調整も課題だと思います

栄養士 OV 会として、専門性を生かして少しでも隊員の皆さんの役に立ちたいです。OV の方からの連絡もお待ちしています

リンクトインは動画配信も可能で、多くの情報のやりとりが可能です。活発に意見を交換し、新しい国際協力のあり方を模索しましょう

日本からの情報発信だけでなく現地の情報をタイムリーに得られるようになりました

青年海外協力隊栄養士ネットワークとは
元栄養士隊員を中心としたOV会。帰国隊員の活動報告会、国際協力における栄養分野の意見交換や情報交流、調査・研究や学会での発表などを実施。OVとしての経験を現役隊員に伝える活動にも力を入れる。（問い合わせ）▸ jocvnut.net@gmail.com

青年海外協力隊栄養士ネットワーク代表
氏家真梨（うじいえまり）さん
（ボツワナ／栄養士／ 2003年度1次隊）
盛岡大学栄養科学部講師

藤掛洋子（ふじかけようこ）さん
JICA海外協力隊技術顧問（家政・生活改善、栄養士）（パラグアイ／家政／1992年度2次隊）
横浜国立大学都市科学部長、大学院教授

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈エルサルバドル〉

中南米で初めて協力隊が派遣された、中央アメリカの小国

エルサルバドルの基礎知識

エルサルバドル

面積：2万1,040平方キロメートル（九州の約半分）
人口：約649万人（2020年、世界銀行）
首都：サンサルバドル
民族：スペイン系白人と先住民の混血約84%、先住民約5.6%、ヨーロッパ系約10%
言語：スペイン語
宗教：キリスト教（カトリック）

※2021年11月25日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofaj/area/elsalvador/

派遣実績

派遣締結日　：1968年7月26日
派遣締結地　：サンサルバドル
派遣開始　　：1968年9月
派遣隊員累計：589人

※2022年5月31日現在
出典：国際協力機構（JICA）

＼ お話を伺ったのは ／

山本美香（やまもとみか）さん

PROFILE
1992年、国際協力事業団（現JICA）に入る。ボリビア事務所長、青年海外協力隊事務局総務・企画担当次長を経て、2017年、女性として初めて同事務局長に就任。19～21年、エルサルバドル事務所長。現在、ウルグアイ支所長。

望月 久（もちづきひさし）さん

PROFILE
1967年、海外技術協力事業団（現JICA）に入団、青年海外協力隊事務局に配属。70年、エルサルバドルに協力隊調整員として派遣された。その後、エルサルバドル駐在員、パラグアイ駐在員、メキシコ事務所長、青年海外協力隊事務局長、理事などを歴任。

困難と闘ってきた「救世主」の国 内戦終結30年で進む変革

日本とも共通点の多いエルサルバドル。国づくりへ向け、協力隊への期待にも大きなものがありました。派遣開始当初の状況に詳しい望月 久さん、最近の現地の様子を知る山本美香さんにお話をお聞きしました。

エルサルバドルは16世紀にスペイン領となったが、1821年に独立。その後は植民地になることはなかった。しかし、スペイン語で「救世主」を意味する国名とは裏腹に、困難と向き合ってきた国でもある。20世紀も長期間、軍事政権下にあり、1979年から92年まで続いた政府と反政府勢力との内戦の犠牲者は推計で約7万5千人。多くの国民が移民としてアメリカへ渡った。

協力隊の派遣は、中米で最も早く68年に始まった。70年から初代のJICAエルサルバドル協力隊調整員を務めた望月 久さんは協力隊派遣のきっかけを「元駐日大使で親日家だったワルテル・ベネケ文部相から、68年開催のメキシコシティオリンピックに向け、選手を指導してほしいと伝えられたこと」と振り返る。

第1陣の派遣は、陸上や水泳など体育職種の8人。オリンピックに向けた代表選手の指導には間に合わなかったが、「体育教員養成学校」設立への協力を求められ、カリキュラムの作成や生徒の募集、開校後の実技指導まで深く関わった。しかし、79年に内戦が勃発。隊員の退避を取り仕切ったのは、2度目の駐在となった望月さんだった。前出のベネケ文部相も内戦中に暗殺された。隊員の派遣再開は、和平合意翌年の93年だった。

「中米共通の課題ですが、格差、雇用、教育など取り組むべき課題が多く残されています」と話すのは、前JICAエルサルバドル事務所長の山本美香さんだ。「特に地方では就労の機会が限られ、仕事を得るために必要な教育の機会も十分ではありません。一方で銃器が出回り、ギャングなどが若者を取り込もうとする。誘いを断れば危害を加えられる恐れもあります」。推定250万人の在米エルサルバドル人からの送金は、本国のGDPの約2割ともいわれる。生活の支えであるが、それがアメリカ型消費生活を促しているとの見方もあるという。

現在は、2019年に就任したナジブ・ブケレ大統領が高い支持率の下、投資促進、大型インフラ事業、治安回復などを進めるが、ビットコインの法定通貨化など物議を呼ぶことも少なくない。

国土が狭く、地震や火山噴火、洪水などの災害も多い国。「人々は忍耐強く、勤勉で、まじめ。『中米の日本』といわれるほど」（望月さん）。安全確保のため、協力隊が活動できる地域も行動も制約があるが、信頼や期待は大きく、派遣50周年の18年には記念切手も発行された。

活火山やカルデラ湖の多いエルサルバドル
（写真提供＝JICA）

Text＝三澤一孔　プロフィール写真提供＝ご本人

派遣国の横顔

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈エルサルバドル〉

三上（みかみ）るり香（か）さん
体育／2015年度2次隊・神奈川県出身

PROFILE
体育大学在学中の教育実習をきっかけに教育への関心が高まる。高校時代からやっていたダンスやカナダ留学で、異なる背景の人と接することに楽しさを感じ、海外の教育への興味も出てきたことから協力隊に応募。帰国後、埼玉県で1年間の小学校教員を経て、現在は神奈川県内の高校で体育を教える。

運動会で、トロフィーを手に、参加者に囲まれる三上さん（三上さん提供）

車いすマラソンの選手たちと髙梨さん（左から2人目、髙梨さん提供）

髙梨（たかなし）俊行（としゆき）さん
養護／1995年度3次隊・群馬県出身

PROFILE
大学卒業後、民間企業に勤務。阪神・淡路大震災をきっかけに進路を再考し、協力隊へ。JICA国内協力員などを経て、現在は飲食業に従事。東京2020パラリンピックでは、エルサルバドル選手のための寄付集めや強化合宿にも協力。来日したエルサルバドルパラリンピック委員会委員長で派遣当時のカウンターパートと、30年ぶりに再会した。

支え合う人々と共に歩む支援

体育職種から始まった協力隊派遣は、やがて障害者スポーツの支援へ。自然災害の多いエルサルバドルで日本の教訓を生かす防災職種の隊員と共に紹介します。

猛特訓の成果をスポーツの楽しさに

協力隊派遣の始まった頃、エルサルバドルで初めての車いすバスケットボールが行われたという。内戦中には車いすの陸上競技も始まり、1994年にはエルサルバドル車いすスポーツ協会が設立された。選手強化に向け、96年4月、同協会に派遣されたのが、髙梨俊行さんだ。

髙梨さんがまず期待されたのは、半年後に迫った車いすバスケットボールの中北米カリブ地域のシドニーパラリンピック1次予選突破だった。

指導を始めると、髙梨さんはすぐに一目置かれる存在となった。「実際に競技用車いすに乗り、パスやシュート、ディフェンスをやって見せることができたから」。それは、派遣前に日本で行った3カ月間の猛特訓の成果だった。

バスケットの経験もなかった髙梨さんは、技術補完研修（※）として東京都多摩障害者スポーツセンターで、厳しい指導を受けた。全日本チームの指導経験もある職員につき、障害者選手と普通にプレーができるレベルを目指し、日中はもちろん、「朝錬」「夜錬」もこなした。この間、体重は5キロ減った。

厳しい練習に耐えて渡航した髙梨さんだが、指導で心がけたのは「楽しくやること」だった。「人が集まらないことには、スポーツの面白さは伝えられない。そもそも練習会場に足を運べる限られた人しか競技ができない。内戦や病気で障害を負った人が、そのときだけでも嫌なことを忘れて夢中になることを考えました」。練習はゲームやシュートを中心にした。シュートが連続10本入るまで繰り返し、達成したチームは練習を終えて打ち上げへ。楽しくボールを追ううち、体力や技術は自然に向上、半年間で地域の2番手クラスの国々と対抗できるレベルに達した。

迎えた予選。キューバには惜しくも敗れたが、髙梨さんが指揮をしたプエルトリコ戦は勝利した。得失点差で惜しくも2次予選には進めなかったが、髙梨さんの評価は高く、グアテマラから講演を依頼されるほどだった。

髙梨さんは、車いすの陸上競技も指導した。日曜は1週おきのペースでマラソンや陸上の遠征に行った。また、「世界最大、最高レベル」ともいわれる「大分国際車いすマラソン」に選手を参加させたいと準備を進め、97年の大会に、内戦で地雷のために両足を失った選手がエントリー。さらに翌年は2人の選手が出場した。選手たちは日本での取材を受け、組織だった大会運営などに驚いた様子だった。さまざまな体験をした選手たちは帰国後、仕事を探し、就職することもできた。

障害のある人とない人が合同で大運動会

髙梨さんの派遣から約20年後の2015年、体育の職種でエルサルバドルのスポーツ庁に派遣され、障害のある人もない人も一緒に楽しむスポーツを実践したのが、三上るり香さんだ。

三上さんは、体育大学で学んだ知識を生かし、首都サンサルバドル市内の特別支援学校で知的障害などの子どもたちを対象に体育の授業を行った。そのなかで陸上競技の指導も行い、ラテンアメリカ国際大会の障害者陸上競技部門の予選に出る選手を選出。その結果、4人が大会に出ることができた。

その三上さんが任期後半、半年がかりで準備したのが、障害のある人とない人、各150人が一緒に参加する運動会だった。それまでに関わった団体や学校にも呼びかけ、玉入れをはじめ、障害のある人が主役になれるような新たな競技を企画。すべての種目で、障害のある人とない人が共に楽しめるようにペアやチームを組んで行った。

三上さんも障害者や障害者スポーツを取り巻く環境の厳しさを実感していた。多くの国民が貧困で余裕がないなか、「障害者は特に、食事か軽食が出るなら練習に来る、そうでないなら来ないという状況でした。交通費も負担になるため、練習に誘うと、送り迎えの車を出してくれるかと聞かれました」。

障害者スポーツの拡大に向けた予算も少なく、三上さんは「そのために障害のない人の理解を広げることが大切」と考えるようになっていた。だからこそ、この運動会には、そうした状況を変えたいという思いを込めた。「障害のない参加者から『すごく楽しかったよ、ルリカ』という声が返ってきたときには、嬉しかったです」。一緒に取り組んできた人たちからは「10点満点の10点！」と評価された。

障害のある人もない人も共に参加する運動会。視覚障害者と一緒に楽しめるように目隠しリレーの競技も行った（三上さん提供）

「16年のリオパラリンピックに、パワーリフティングの選手が出場したことで、支援が動き始めた」と三上さん。2020東京パラリンピックには3人が出場し、1人がエルサルバドル初のメダルとなる銅メダルを獲得した。

地域防災委員会の設立で洪水の被害を回避

2011年10月、熱帯暴風雨12－E

※現在は「課題別派遣前訓練」になりました。

活動の舞台裏

ニッポン柔道、一足早く再開

エルサルバドルに柔道隊員が初めて派遣されたのは、派遣開始翌年の1969年だった。内戦が始まった79年から93年まで協力隊の派遣自体が休止され、障害者スポーツに取り組んだ髙梨俊行さんが派遣された96年4月は、現地に柔道隊員はいなかった。ところが、その間に日本人による柔道の指導が始まっていたという。

舞台となったのは、首都サンサルバドルの柔道道場。指導者は、92年のバルセロナオリンピックで古賀稔彦選手と対戦したフアン・バルガス氏だった。髙梨さんはそこにいた日本人のコーチと同期の隊員を通じて知り合った。聞けば、この日本人コーチ、「自分は柔道ができる」と在日エルサルバドル大使館に売り込み、渡航してきたという。

エルサルバドルの柔道の様子（NPO法人柔道教育ソリダリティーがエルサルバドル柔道連盟に中古畳400枚を贈ったときの写真=2018年、写真提供＝在エルサルバドル日本大使館）

学生時代、柔道に打ち込んだ髙梨さんは「フアン・バルガス選手がどれほど強いかやってみよう」と道場に乗り込み、久しぶりの柔道を楽しんだ。現地の柔道には、ブラジリアン柔術などの影響もあったようで、受講生たちから「日本流の柔道を見せてほしい」などと声をかけられた。結果、髙梨さんは自由な出入りが許され、活動の合間にときどき道場を訪れ、受講生たちと汗を流すことになった。やがて、同様に柔道経験のある後輩隊員も道場に足を運ぶようになったという。

柔道隊員の派遣は97年に再開。その後も継続的に派遣され、何人もの教え子がオリンピックに出場している。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈エルサルバドル〉

サンビセンテ市防災課の重要な活動だったごみの撤去・回収（山口さん提供）

「ぼうさいダック」のカードを使って災害時の適切な対応を伝える。（右から2人目、中野さん提供）

山口まどか（やまぐち）さん

防災・災害対策／2014年度1次隊・兵庫県出身

PROFILE

大学卒業後、企業に勤務するが、「人の役に立つ仕事がしたい」と転職。消防士として8年間働く。海外への興味に加え、「防災」の職種があることを知り、協力隊に応募した。現地の人たちから学んだ生き方を、多様な人が自分らしく暮らせる社会のヒントにしたいと、NPO法人多言語センターFACILのスタッフとして働く。

中野元太（なかのげんた）さん

村落開発普及員／2010年度1次隊・兵庫県出身

PROFILE

阪神・淡路大震災をきっかけに設置された兵庫県立舞子高校環境防災科の2回生。高校在学中からネパールを訪問するなど海外で防災に関わる活動を続け、大学在学中にはスリランカ、インドネシアでも活動した。JICA企画調査員（防災案件実施監理）、NPOスタッフなどを経て、京都大学防災研究所巨大災害研究センター助教。

がエルサルバドルを襲い、全土に非常事態が宣言された。同国中部のサンペドロ・マサウア市では、市内を流れる三つの川が決壊し、市南部全域が水没した。雨は10日間降り続き、過去、洪水で大きな被害を出してきただけに懸念が高まった。

避難者数や浸水面積では国内で最も被害が深刻な地域の一つとなったものの、同市では一人の死者も出なかった。その背景にはコミュニティごとに設立された地域防災委員会の活動があった。この設立を進める活動に関わったのが、10年6月から同市危機管理課に配属されていた中野元太さんだ。

中野さんは神戸市の出身。1995年1月、小学1年で阪神・淡路大震災を体験した。家族や自宅に被害はなかったが、地震で崩れる家と地震に遭っても崩れない家の差に関心を持つようになり、兵庫県立舞子高校環境防災科に進学、その後、途上国で防災教育を実践したいと協力隊に応募した。

たびたび洪水被害を受けてきたサンペドロ・マサウア市は、防災力を高めるため、国内初の危機管理課を設置。要請を受けて派遣された中野さんは、同課の職員と共に地域を回り、地域防災委員会の設立を進めた。地域のリーダーと話し、委員集めを依頼した。

過去、洪水の被害が少ない地域では委員候補が3人しか集まらないようなこともあった。中野さんは、委員会がなければ被災しても支援が受けられないことなどを説明し、「次回、知り合いの方をそれぞれ1人連れてきてください」と伝えた。これを繰り返すことで、十数人のメンバーを集め、委員会をつくっていった。防災委員会を拠点に、防災訓練や防災マップ作成も進めた。

2011年の熱帯暴風雨12-Eで全域が浸水したサンペドロ・マサウア市（中野さん提供）

学校の防災教育では、阪神・淡路大震災をきっかけにできた教材をもとに、文化や習慣に合わせた現地版をつくった。それが、片面には地震や火災などの災害の絵、裏面に頭を守るアヒルの絵などが描かれた「ぼうさいダック」。日本版では、地震を表す絵としてナマズが描かれているが、現地の人がナマズから連想するのは「スープ」。そこで現地版は、大地が怒っている顔にした。火災の対応を示す絵は、現地で親しみのないタヌキの絵から、カメがマスクをしている絵に替えた。日本版にない「野良犬と遭遇」のカードも追加した。

2011年10月の熱帯暴風雨12－Eでは、中野さんたちが設置を進めてきた地域防災委員会が、早い段階から住民に避難を呼びかけ、取り残された住民の救助活動や避難所の運営などにあたった。中野さんは10日間ほとんど家には帰らず、活動を共にした。「体力的にすごくハードでした。しかし、地域の人が主体的に対応してくれたことで被害を抑えることができました。やってきたことが無駄ではなかったと思いました」。

人と人をつなぎ成果を拡大

「8年間の消防士としての経験を生かすには、ぴったりの活動」と応募し、2014年7月から中部のサンビセンテ市などで活動した山口まどかさん。しかし、活動は予想とはかなり違った。

「当初は、活動のほとんどがごみ拾い。ときどきが山火事の消火活動への同行でした」。現地で防ぎたい「災害」が、日本とは異なっていた。大きな課題の一つが、蚊が媒介するデング熱。水がたまる場所を少なくし、蚊の発生を抑制するため、排水路に投げ捨てられたごみを拾うことが同市危機管理課の重要な活動で、住民の要望も強かったのだ。

日本の防災の経験を生かせないことに焦りも感じた山口さんだが、同課の仕事を続けるなかで自然と知り合いが増えていった。そして人と人をつなぐことを意識して活動を続けるようになると、「学校で防災の研修をやってほしい」と頼まれることも増えた。身近なもので担架を作ったり、バケツリレーをしたりする「カエルキャラバン」を、月1回程度のペースで実施した。

別の市の医療機関に派遣されていた協力隊員から「うちのスタッフに防災訓練をやってほしい」と聞くと、危機管理課の職員と一緒に出かけた。国の出先機関として各県に設置されている市民防災局との連携をJICAに提案。新たな隊員が同局に派遣されると、同局によるカエルキャラバンが年間50～60回、開かれるようになった。

地域と共に生きる人々 信頼の大切さを知る

それぞれの防災活動を進めてきた中野さんと山口さんが、共通して感じたのは、住民同士の助け合いの強さだ。

山口さんによると、火事で消防に連絡しても、応答がないこともある。日本なら大問題になりそうだが、住民たちは「今日は留守番電話で消防は来ない」とつぶやき、平然と消火活動を始める。誰かがけがをしたとき、救急車が来なければ、通りかかった車で病院へ連れていく。「不安になりそうですが、周りの人や近所の人が必ず助けてくれるので、不安はないんです」（山口さん）。

中野さんは、地域を回って地域の人にあいさつすることや、地域のリーダーを尊重することを大事にした。そのうえで、「身を守るためには、こういう方法もありますよ」と話すと、「じゃあ、やってみよう」という反応が返ってきた。「自分たちの地域は自分たちで守るという意識が強かった。内戦中、反政府勢力が強い地域だったことも影響しているかもしれません」（中野さん）

時を経て、山口さんは今、日本に暮らす外国人と地域をつなぐ仕事をしている。協力隊時代に現地で支えてもらった安心感を、今度は自分が提供することで、誰もが自分らしく暮らせる日本社会になれば、との思いを込めて。

活動の舞台裏

何ものに代えがたい絶品マンゴー

エルサルバドルは、野菜や果物に恵まれた国。特に南国系のフルーツが豊富だ。そのなかでも、防災・災害対策で活動した山口まどかさんのイチオシは、マンゴーだ。

エルサルバドルでは10種類以上のマンゴーがあり、できる時季が異なれば、味も異なる。黄色く熟したマンゴーがなるのは3～5月ごろだが、青いマンゴーは年中なっていて、これも食べることができる。野生のものも、庭に植えられているものもあり、庭にあるものは、「このマンゴー、取ってもいいですか」と声をかけ、熟した実をもいで、そのまま食べる。知り合いから、おすそ分けとしてマンゴーをもらうこともよくあるそうだ。

山火事の消火活動の合間に、野生のマンゴーで喉を潤す山口さん（右）と同僚たち（山口さん提供）

山火事の消火活動に同行すれば、周囲に食事ができる場所はない。そんなときに空腹と喉の渇きを癒やすのは、野生のマンゴー。消火活動の合間に、1人10個くらい食べたという。マンゴーが大好きな山口さんは、帰宅後におすそ分けでもらったマンゴーを、さらに五つほどぺろりと食べることもあった。

マンゴーはウルシ科の植物で、皮や果肉にかぶれ（接触皮膚炎）を引き起こす成分が含まれている。実は山口さん、マンゴーのかぶれが出やすい体質で、マンゴーを食べると口の周りがかぶれて切れてしまうことも。それでもマンゴーの魅力には勝てず、かぶれたときは薬を塗りながらも、またマンゴーを食べていたという。

専門家に聞きました！

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

今月のテーマ：前任者と比較されたら

今月のお悩み

私より技術も経験もあり、語学に長けていた前任者と比較されます。

（農林水産分野／アジア地域／女性）

私より社会人経験が長く、技術力があり、活動先の仲間から頼りにされていた前任者。語学力にも長けており、最初からコミュニケーションも取れていて、職場の仲間からは尊敬され、プライベートでも人気者だったようです。

慣れない生活で自分の活動に自信が持てない日々が続くなか、「前任者の〇〇さんはこれをしてくれた。あなたはできないの？」と言われたり、「何を話しているかわからない」とあからさまに見下されたりして、落ち込みます。

今月の教える人　太田美帆（おおたみほ）さん

ガーナ／村落開発普及員／1996年度1次隊・茨城県出身

JICA国際協力専門員（農村開発分野）。玉川大学リベラルアーツ学部教授。2021年度までコミュニティ開発職種の技術顧問。世界各国の農村でお母さんを元気にする生活改善活動に携わる。共著書『世界に広がる農村生活改善：日本から中国・アフリカ・中南米へ』（晃洋書房）、共訳書『貧しい人を助ける理由』（日本評論社）など。

太田先生からのアドバイス

行動範囲を広げ、ありのままの自分を見てくれる人を味方につけましょう。

前任者との比較でしか自分を見てもらえないのは、つらいですね。私自身も隊員時代は「前任者の亡霊」に悩まされました。

私の派遣は前任者のAさんが帰国した1年後で、村にはAさんにあやかって名付けられた赤ちゃんが数人いましたから、Aさんが村に溶け込み愛されていたことは、着任してすぐにわかりました。村の人々から「Aはこうだった」と、Aさんの武勇伝を何度も聞かされ、一挙手一投足すべて比べられました。

今回の相談への、私からのアドバイスは二つです。

まず、前任者の人気の理由を分析しましょう。理由があなたが納得できる、よいことであれば、それをまねしてみては。語学力は努力あるのみですが、自分ではどうにもならない技術力や経験面であれば、「私にはできないから一緒にやろう、教えてほしい」と協力を求めればいいと思います。隊員にとって大事なのは「教える、指導する」姿勢よりも、相手から学び、共に成長しようとする姿勢だと思うのです。

私の場合、前任者が人気だったのは村人を先導して活動を主導するタイプだったからのようでした。率先して何でもやってくれるので、村人にとってはありがたい存在です。事業費も三つの団体から確保し、活動を軌道に乗せて、誰からも感謝されていました。でもAさんの任期終了後、すべてのプロジェクトは止まったまま。村人も配属先も「続きはAの後任がやる。自分たちがやることではない」と思っていたようで、私の着任までの1年間で状況は後退すらしていました。

みんなが大好きなAさんの活動を、なぜ誰も引き継がなかったのか。私はAさんのやり方では村人や配属先のオーナーシップが育たなかったと分析し、いずれ帰国する隊員が、活動の主役になってはいけないと痛感しました。そこで村人や配属先を主役に、「これからは一緒にやっていこう」と誘い、自分は裏方に徹しました。ところが何度伝えてもわかってもらえないばかりか、「いつまでたってもミホはやってくれないんだね」と失望される始末。真意を理解してもらえず、悩みました。

「前任者の亡霊」から逃れたかった私は、行動範囲を広げました。これが私からの二つ目のアドバイスです。

私は配属先以外の団体や、活動と直接関係ない人とも積極的に話し、前任者を知らない人との交流を深めました。そうしてようやく、前任者との比較ではなく、ありのままの私を見てくれる人ができ、私の活動方針に共感してくれる人が味方についてくれ、生きた心地がしました。

電気も電話もなかった任地では、日々のイライラや憤りも、現地語で説明しなければなりませんでした。でも今思えば日本語を使わないその環境がとてもよかったと思います。

村には他村から来た学校の先生や普及員、ヘルスワーカー、他部族の人たちもいて、彼らの客観的な意見はとても役立ちました。語学力が向上しただけでなく、忍耐強く私の話を聞いて慰めてくれる味方がたくさんできました。現地語でうまく説明できずもどかしい気持ちでいるときにも、「ミホ、泣いてもいいのよ」と抱きしめてくれる友人もできました。

ネット回線の普及から、今は悩み事を隊員同士や日本の友人、家族に相談することが多いかもしれません。それも否定はしませんが、私のお薦めは、悩みは現地の人に話して現地の人々の考え方から学ぶことです。周囲の意見を取り入れて活動していくうちに、活動が軌道に乗るだけでなく、一生涯の友情も築けるかもしれません。

Text＝ホシカワミナコ（本誌）　写真提供＝太田美帆さん　※質問は現役隊員やOVから聞いた活動中の悩み

この職種の先輩隊員に注目！

～現場で見つけた仕事図鑑

#0012

「自動車整備」

分　　類：鉱工業
派 遣 中：8人（累計：1,473人）
類似職種：建設機械

※人数は2022年5月末現在。

CASE 1

平川修一郎（ひらかわしゅういちろう）さん
サモア／1981年度4次隊、
SV／ネパール／2016年度1次隊・福岡県出身

PROFILE
専門学校卒業後、トラック販売会社を経て、協力隊に参加。帰国後は国内トラックメーカー、欧州製トラック輸入会社、英国製自動車輸入会社などに勤務。定年後にSVに参加。現在、インドネシアの日系自動車メーカー勤務。

配 属 先：ネパール警察本部車両管理部
要請内容：警察車両管理の充実を図るため、ガソリンエンジン用EFI（電子制御燃料噴射装置）、ABS（アンチロック・ブレーキ・システム）、エアバッグ、コモンレールシステムなどの技術研修や安全運転、エコ運転の研修の実施など。

CASE 2

内山弘幸（うちやまひろゆき）さん
ザンビア／1988年度1次隊、
ウガンダ／2021年度1次隊・富山県出身

PROFILE
専門学校卒業後、自動車販売会社勤務。現職参加で協力隊に参加し、復職。ほか富山県自動車整備振興会技術講習所で5年ほど講義を担当。富山県青年海外協力隊を育てる会の事務局長も務めた。定年を2年残して退職して参加。

配 属 先：ブイクウェ県ンジェルにあるナイル職業訓練校
要請内容：実習をメインにした授業の実施とサポート、指導員に対する技術的アドバイスや指導上のアイデアの共有、工具の正しい使い方や管理、ワークショップの整理整頓の指導。

開発途上国での「自動車整備」技術の普及は、整備不良車を減らし、交通安全の向上や環境問題の改善にも貢献する。

活動は①職業訓練校や技術系の高等専門学校などで講義や実習を通じて整備技術を指導する、②派遣国の省庁、地方自治体などの公共部門の自動車整備工場で整備技術を指導する、の二つに分けられる。要請内容によって、エンジン分解修理、キャブレター修理など、日本では一昔前の技術が必要であったり、逆に電子制御、ハイブリッド車の点検修理技術など、新しい技術分野の知見を必要とする場合もある。

CASE 1
警察車両の適正管理のための技術指導とデータベース構築

平川修一郎さんのシニア海外協力隊（以下、SV）での配属先はネパール警察本部の車両管理部で、約300台の車両と約400名のドライバー（警察官）を抱える国内最大規模の組織だ。通常業務では4WD車とピックアップトラックが使用され、ほかに、中・大型トラック、バス、白バイなど車両は多岐にわたり、その多くはインド製車両だ。整備士は通常は整備を行っているが、必要に応じてほかの警察業務も行う警察官兼整備士。整備工場は2カ所あり、技術オフィサーが14人、熟練の整備士約20人、見習いとヘルパー約40人。彼らに整備技術のトレーニングと現場での指導、車両管理データベースの構築などを行った。

最初のサモアでの協力隊活動後、東南アジアや中東で自動車整備技術の指導にあたった経験のある平川さん。SV赴任時に「勘と経験に頼る途上国の整備」を予想してはいたが、ネパールの現場は思った以上だった。

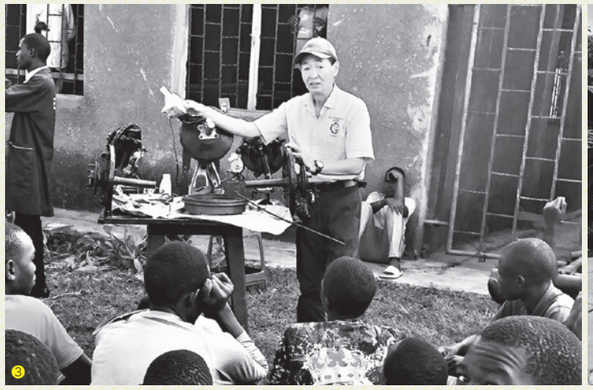
「整備士は基本的な故障診断と部品の交換はできるものの、電気装置やコンピュータ制御の故障診断は初歩レベルでした。部品交換も正しい作業（設備・工具・手順）をせず、応急修理や危険な間違った対処をするので、修理しているつもりが次の故障の原因をつくっている。正確な作業は時間がかかり嫌われがちで、修理能力の不足と『とりあえず動けばよい』というマインドでいることが大きな問題でした」

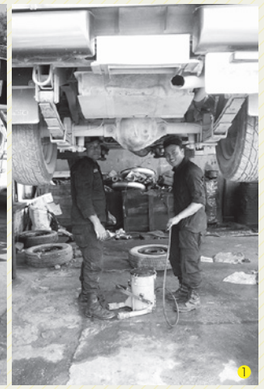
こうした現場の整備士の技術レベルに加えて、管理する立場の技術オフィサーにも問題があった。大学で機械工学を学び外国で技術研修を受けた人が多いものの、現場作業の経験がなく、整備士に故障診断や作業指導ができなかった。平川さんは現状に合わせて11の研修コースをつくり、約50人を7グループに分けて受講してもらった。

「若い整備士たちは興味を持って熱心に聞いてくれました。研修後、現場でオフィサーに危険なやり方を禁止する指示を出してもらうと、それが守られるようになったので、研修や現場にオフィサーを巻き込むようにしました」

配属先のもう一つの大きな課題は、車両管理の方法だった。点検・修理の有無や頻度は担当ドライバー任せで、記録もExcelなどで残されている程度。当初の要請はExcelの研修だったが、配属先から車両を効率的に維持・管理するデータベース構築を相談された平川さんは、車両本部の業務内容を分析したうえで管理内容や方法を提案し、JICAに現地業務費を申請してソフトウエア開発に着手した。修理や整備をはじめ、配車、給油や走行距離なども記録し、総合的に管理・運用するデータベースを構築、任期終盤に稼働させることができた。

「配属先の念願の取り組みでした。ネパールの全警察車両が、適正に維持・管理され、コストも抑えつつ安全に運行できるよう役立ててほしいと願っています」





❶ネパール警察の車両整備工場で整備の様子を見る平川さん。「ほとんどの車両の整備作業は屋外でしかできず、土ぼこりが舞うなかでの作業には正直、戸惑いました」（平川さん）
❷4WD車が多いネパールの警察車両。色は白と紺で部署で分かれていて、日本のような普通乗用車や軽自動車のパトカーは使われていない
❸実習で説明する内山さん。生徒たちからは「Taata（お父さん）」と呼ばれ慕われている。「授業終了後にわからない人はTaataのところに来て」との呼びかけに集まる生徒が増えてきた

活動の基本

配属先の状況に合わせ、さまざまな自動車の知識が必要になる。臨機応変に対応を行う

CASE 2
「顧客満足」を提供できる自動車整備士を育てたい

2021年12月から活動中の内山弘幸さんの配属先は、ウガンダ最大規模の職業訓練学校。この国を走る車の9割が日本の中古車のため、日本車の整備技術を持つ人材が求められ、実習指導を強化するために派遣された。現地の教官と共に自動車の構造・分解・作動を教える実習を行い、教官には電気関係の知識や技術を教えている。

現在担当しているのは6カ月の基礎コースで、約50人が学ぶ。修了後の実技試験に合格すれば整備士資格が取れる。

「小学校も満足に通えなかった生徒から、中学校を卒業した生徒まで、15歳から20歳のさまざまな生徒がいます。座って授業を受けた経験のない生徒もいて、勝手にどこかに行ってしまう生徒を捕まえに行ったり、寝ているのを起こしたりすることから授業が始まります」

実習環境も厳しい。野外で行うことが多く、マンゴーの木の下に、ブレーキやクラッチを運んできて、分解して組み直し、仕組みを学ぶ。日本の専門学校などとは異なり、学校には動かせる自動車がほとんどないため、エンジンが動く様子はプロジェクターで動画を見せた。

この国は若者が非常に多く就職難のため、資格を持つことが有利になる。そのため、「生徒たちにはなんとか就職して、自立できるようになってほしい」と話す内山さん。生徒に一番伝えたいことは「顧客満足度（CS）」の大切さだ。「整備はお客さまのために行うもの。身なりや工場もきれいにし、車の扱いも丁寧にする。会話も順序を追って説明し、修理をしてもらうかどうか決めてもらう。そうしたサービスができれば整備士として強みになると話しています」。教官たちも内山さんの説明に納得し、カリキュラムにCSのデモンストレーションを組み込むようになった。また、当初内山さん一人で行っていた教室の掃除を教員や生徒も行うようになった。

協力隊の自動車整備職種に対しては、配属先の条件に合わせて活動する工夫が必要だという。「今の日本の自動車整備では行わないことも、求められます。焦らず臨機応変に対応するといいでしょう」。

Text＝工藤美和　写真提供＝平川修一郎さん、内山弘幸さん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

西口記子（にしぐちきこ）さん

（ベナン／小学校教育／2016年度1次隊・大阪府出身）

ベナン共和国では地方都市ホエヨベ市の教育行政機関に配属。市内の小学校を巡回して、主に図工と体育の授業の定着を目的とした活動を行いました。写真左が西口さん。

教員を対象にした図工研修会を開催

体育の指導のほか、ベナンの教育隊員の図工分科会に所属して図工も教えていました。任期終盤には、配属先の教育行政機関からの要望を受けて大規模な図工授業の指導研修会を実施しました。受講者はホエヨベ市内の小学校の教員約100人です。教材には、ベナンで活動する教育分野の隊員たちと共に作成した教員用の指導補助マニュアル（下②）を活用しました。

図工の経験が乏しい教員でも授業が行えるよう、はさみやのりなどの使い方をはじめ、具体的な授業のアイデアや指導のポイントを易しく解説しました。

指導研修会で、受講者である教員たちの様子。左ページで紹介している「アフリカ布のパッチワーク」に真剣に取り組んでいました

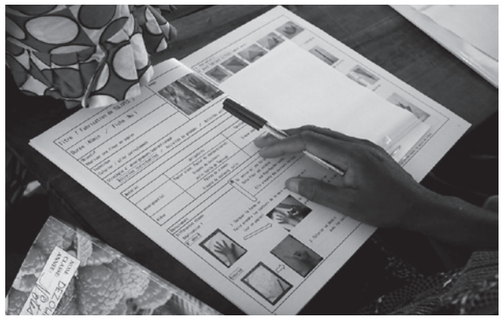
図工授業の指導研修会　開催までの流れ

①着任～普段の図工授業の準備

着任時期が7月で小学校の長期休暇と重なっていたため、10月の新学期に向けて、配属先の事務所に来られる先生に見てもらおうと、切り絵や折り紙などを制作しました。それらの展示や説明書を配属先に掲示したところ、市内の小学校の校長たちに私の存在を知ってもらえるようになり、各校への巡回指導の要望が増えました。

②指導補助マニュアル作り

活動の傍ら、ベナンの教育隊員たちによる図工分科会のメンバーと協力して、教員向けの指導書（下写真）を作りました。
任期1～2年目の前半に行った授業の内容をまとめたもので、対象学年別に適したアクティビティを写真と簡単な文章で説明。それぞれの担当者が1～2項目を受け持ちました。印刷代などはJICAのベナン支所に現地業務費を申請し、負担してもらいました。



③研修会の開催まで

1カ月前	日程が決定 教育行政機関から各学校へ連絡をしてくれました。
3週間前～前日まで	講師役の先生と研修内容の打ち合わせ 3人の先生に指導書を渡し、担当してもらうアクティビティを口頭で説明（1人ずつ計3回）。 各先生が担当するクラスの図工の時間に、研修で実施するアクティビティを授業（1人ずつ約1時間）で実施しました。私はサポート役として、先生が主導で行いました。 上記の打ち合わせと並行して、研修会で使用する教材集めを行いました。
前日および当日	使用する教室の準備

水曜日は小学校の授業が午前中で終わるため、午後に研修会を開催。約50の学校から教員約100人の参加がありました。

④研修会の進め方

それぞれのアクティビティは、これまでの授業を通して信頼関係を築いていた3人の先生に講師役をお願いしました。まず道具の扱い方について手本を示したのち、講師役に説明をしてもらうという形のチームティーチングで進めたので、言葉も内容も伝わりやすかったと思います。

図工授業のアイデア・指導のポイント

ベナンでは物が不足しているため、はさみも児童全員が持っているわけではありません。画材にしても絵の具はほとんどなく、色鉛筆も限られた子しか持っていませんでした。そのため、紙、のり、端切れなどでできる切り絵や貼り絵などを中心とした内容を心がけました。時計、風車など、作ったあとも遊べるものが子どもたちに好評でした。

活動のヒント

「現地に即した授業アイデア」を盛り込むようにしました。人々の衣類に使われるアフリカ布の端切れは安価で入手できるので、端切れを使ったパッチワーク（貼り絵）を実施しました。

図工授業のアイデア・指導のポイント

切り絵

紙を真ん中で折り、重ねたまま切って広げると左右対称の絵柄が現れる切り絵。低学年の子どもでも楽しめます。出来上がった絵柄をのりで貼ってつなげる遊びもしました。

準備するもの……
紙、鉛筆、はさみ、のり

のりがないときは、現地で入手しやすいタピオカで、のりを作ることができます。粒タピオカに多めの水を加え、タピオカが溶けてトロトロ状態になるまで加熱します。

アフリカ布のパッチワーク

まず、紙に自分の手形を鉛筆で写し取ります。それを切り抜き、台紙にして、細かく切った端切れをのりで貼りつけていきます。一つひとつの手形は最後に大きな用紙に集めて貼りつけて掲示しました。それぞれに個性の違いが表れた手形が一つの作品になります。

準備するもの……
紙、鉛筆、のり、はさみ、端切れ

作って遊べる工作

時　計

厚紙を丸く切り抜き、紙で作った長針と短針を針金などで取りつけた時計です。分刻みの目盛りまで細かく書いている子も、盤面に自分の名前を書いている子もいました。日本のように児童向けの算数教材が普及しておらず、時計の読み方を覚えるための教材のようなものがなかったので、算数教材として使えるという利点もあります。

準備するもの……
ダンボールなど厚紙、色鉛筆、はさみ、針金

活動を通して

研修会のあとしばらくして、受講した教員たちの学校を回りました。図工の授業を見学すると、研修会で配布した指導書を手に指導を行う姿もあり、教員たちの変化を実感できました。 図工が子どもたちの心を育成する教育であると教員たちに理解してもらえ、学校全体で改めて図工授業の意義を話し合う機会になった学校もありました。

Text＝村重真紀　写真提供＝西口記子さん

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

自分を生かせるのはIT分野 そのスキルを高められることが 会社選びの基準となりました

今月の先輩

佐々木 淳さん Atsushi Sasaki

ジンバブエ／コンピュータ技術／
2019年度2次隊・高知県出身

就職先：

アクセンチュア株式会社

事業概要：戦略策定からテクノロジーを活用したオペレーションの実行まで一貫したサービスを提供し、特にデジタル、クラウドおよびセキュリティ領域において卓越した能力で世界をリードするプロフェッショナルサービス企業

佐々木 淳さんの略歴：

1981年	高知県生まれ
2003年	大学卒業後、国内のソフトウエア会社に就職。SEとして勤務
2019年12月	海外協力隊員としてジンバブエに赴任
2020年 3月	新型コロナウイルス感染拡大により一時帰国
2021年 3月	ジンバブエに再赴任
2021年12月	帰国
2022年 2月	アクセンチュア株式会社入社

JICA海外協力隊ウェブサイト

「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊の経験者のみとなります。 ※対応可能な日は希望進路の分野によって異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

佐々木淳さんがJICA海外協力隊に応募したのは38歳のとき。当時、青年海外協力隊に応募できる年齢が39歳まで（※1）と知り、16年間勤務した会社を退社し、協力隊に参加した。そして39歳のとき、ジンバブエの教員養成校に、コンピュータ技術隊員として赴任した。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、赴任から4カ月後に一時帰国となった。1年後に再赴任するものの、わずか3カ月後にロックダウンで学校は閉鎖、佐々木さんも首都退避となるなど、活動は何度も中断し、計画も変更となった。

帰国後の進路について考え始めたのは、首都に退避していた頃。

「選択肢は、ビジネスと国際協力の二つ。どちらに進むとしても、自分を生かせるのはIT分野です。そこで、IT力をより高められる会社に的を絞り、就職活動を始めました」

就職先に決めたのは、外資系のコンサルティング企業であるアクセンチュア株式会社。IT力や英語力の強化ができることはもちろんだが、北海道での勤務を提案されたことが決め手だったという。

「それまで、ITの仕事をするなら東京しかないと思っていましたが、東京と同じ仕事を地方でもできるなら面白いと思いました」

就職し北海道在住となったが、社内でのやりとりは、メールやチャットを通じて、英語で行うことがほとんどだ。

「以前の自分なら、間違いが怖くて英文でメールを送ることを躊躇（ちゅうちょ）していたと思いますが、今は平気です。ジンバブエでの経験を通じて、英語力というよりも、恐れずに英語を使う力が身についたと感じています」

実は、JICAが進めるデジタルトランスフォーメーション（DX）（※2）推進プロジェクトを同社が受託するなど、両者の関わりは深い。

「いつか、JICAのプロジェクトに関わり、国際協力にも貢献できたらと思っています」

1 協力隊時代　2019年12月～

上・都市部の学校のITインターン生たちと
左：同僚とICTルームにて

ジンバブエではICT教育（※3）が小学校のカリキュラムに加わったことから、配属先である教員養成校でもICTコースが必須科目となっています。しかし、1000人を超える生徒に対して、教員はICT専任と、数学を兼任する2人のみ。約100台あるコンピュータの保守管理も2人が行っていました。そこで、コンピュータの保守管理や校内LANの維持管理などを通じ、ICTコースの授業運営をサポートするというのが、私への要請内容でした。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により一時帰国や首都退避をせざるを得なくなり、その間は、首都や都市部の学校を訪問し、学校のICT環境の改善に取り組むことにしました。すべての学校に共通していたのは、ICT専門家がおらず、数学の教員が授業を行いながらパソコンのメンテナンスをしているということ。ICT専門家の雇用は私が解決できる問題ではありませんが、学校を所轄している高等教育庁にプレゼンする機会を得て、現場に専門家を配属することの重要性を訴えることができました。その後、実際に担当者の雇用に向けて動き始めていると聞いたので、自分の活動の成果が出てきていると感じています。

2 転職エージェントに登録　2021年7月～

ロックダウンで首都退避となったとき、通信環境がよかったことと、時間に余裕ができたこともあり、就職活動を始めることを決めました。具体的には、海外在住でも登録できる転職エージェントのサイトに、履歴書、自己PR、希望する仕事など、自分の情報をアップロードし、企業からの求人オファーを待つというやり方です。前職では、一つの業界、一つのシステムに16年間携わってきたので、より幅広いシステムの導入を経験し、IT力を高めたいと思い、ITコンサルタントを希望しました。

3 面接（オンライン）　2021年8月

約10社を紹介していただき、そのうちの5社と、オンラインによる面接を行いました。のちに就職することになるアクセンチュアとは、1次面接でアクセンチュア・イノベーションセンター北海道のシニア・マネージャーと、2次面接でセンター長と面談しました。聞かれたことは、志望動機や職歴など、履歴書に書いた内容が中心でした。

4 内定　2021年9月

5社と面接をし、最初に内定をもらったアクセンチュアへの就職を決めました。アクセンチュアは世界中に展開しているグローバル企業で、IT力はもちろん、英語力もアップできると思ったのが、就職を決めた理由です。ジンバブエのロックダウンがいつ終わるかわからない状況だったため、首都退避の間に決めておきたかったという思いもありました。

2021年12月帰国 ▶ 2022年2月入社

現在の仕事

企業の業務を代行するアウトソーシングプロジェクトに、システム構築の担当として携わっています。顧客は日本の企業ですが、システム構築は海外にあるアクセンチュアの開発拠点で行っているため、その橋渡しをするのが私の仕事です。アクセンチュアでは、新型コロナウイルスの感染拡大以前から、在宅によるリモート勤務を導入していて、配属先はアクセンチュア・イノベーションセンター北海道ですが、仕事は在宅で行っています。北海道にいながら、世界各国の社員たちとメールやチャットでコミュニケーションを取り、業務を進めています。

アクセンチュア・イノベーションセンター北海道にて

後輩へメッセージ

協力隊時代、企画調査員［ボランティア事業］の方に「アフリカ熱が高いうちに将来を決めないほうがいい」と言われたことが印象に残っています。協力隊員としてアフリカで活動をすると、活動が終わる頃にはアフリカに貢献したいという熱い思いが湧き上がってきます。しかし、いったん冷静になり、2年間の活動で得たものと日本で培ってきたものを見定めて、今後どうすべきか、俯瞰（ふかん）的に見たほうがいいと思います。私自身は任期中に就職活動をしましたが、1年間の一時帰国やロックダウンでの首都退避があったため、冷静になる時間をつくることができました。同じ言葉を、後輩の皆さんにも贈ります。

（※1）現在は45歳までになっています。　（※2）DX…デジタル技術を活用することで、社会や生活を良い方向に変化させること。
（※3）ICT教育…パソコンや電子黒板、インターネットなどの情報通信技術を活用した教育。

Text＝油科真弓　写真提供＝佐々木 淳さん

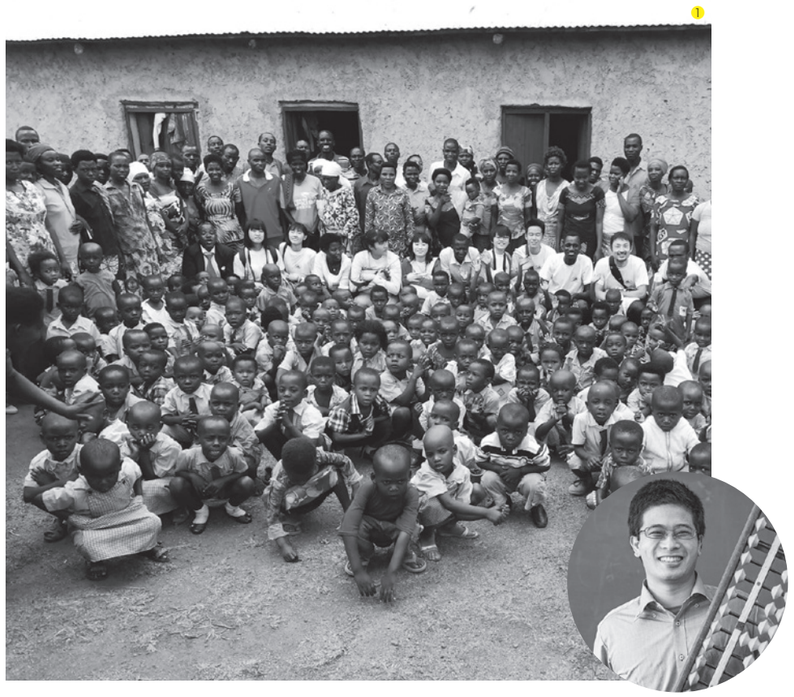
派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

YAMBI CONNECT LTD. 代表
株式会社マキノハラボ 代表取締役

浅野拳史さん　Kenshi Asano

ルワンダ／理科教育／ 2015年度1次隊・静岡県出身



❶YAMBI CONNECT社がコーディネートした「高校生スタディツアー」で日本の高校生とルワンダの生徒や子どもたちが交流を深めた　❷マキノハラボの社員のみなさん
❸「カタショー」を拠点に交流や地域づくりが広がっている　❹協力隊時代。生徒が自ら参加し、体験しながら物理学を理解できるよう、工夫して実験を行った

ルワンダと日本で２つの企業の代表に

「協力隊時代に培った語学力と人脈を生かし、日本とアフリカを結ぶ観光業に挑戦しよう」。協力隊の活動を終えた２０１７年、浅野拳史さんは任地のルワンダでＹＡＭＢＩ　ＣＯＮＮＥＣＴ社（以下、ヤンビー社）を設立した。

学生時代に世界を回り、多文化に触れることで自身の考え方や価値観が広がる経験をした浅野さん。「アフリカの子どもたちの将来の選択肢や価値観を広げる機会をつくりたい」という思いから協力隊に参加した。現地の小中高一貫校の中学校で理科教員として授業を受け持つだけでなく、「教え子たちに多文化交流の機会を」と考え、国際交流に積極的な日本の学校を探し出し、オンラインで生徒主体の交流も続けた。自身でもルワンダ語の勉強を重ね、現地の教育関係者にとどまらず、職種に関係のない行政や農業関係者、ルワンダに関わる日本のビジネスパーソンらとも積極的に交流した結果、通訳を頼まれるなど、隊員時代から幅広い太い人脈が出来上がっていた。

結果、協力隊の任期が終わる頃には「一緒にルワンダを盛り上げるビジネスをしよう」とルワンダの友人を誘い、ヤンビー社の誕生に至った。国際交流を目的とした日本の生徒や学生、ルワンダで事業を検討している日本のビジネスパーソンなどに対し、ニーズに合わせたツアーをコーディネートし、ガイドを行うほか、ルワンダで日本語教室も行っている。

ルワンダに居住してヤンビー社を運営していた浅野さんだったが、21年、日本の企業「マキノハラボ」の代表も務めることになった。「ヤンビー社を設立してから、ある日本人の研究者からの依頼で、ＩｏＴ機器を活用したルワンダの土壌の観測調査に参画し、気象センターなどを導入しました。一方で、その研究者が静岡県牧之原市にあるマキノハラボで茶農家に向け、ＩｏＴ機器を活用したスマート農業の事業も並行して行うということで、数年前から社員としてマキノハラボで働いていました。そして21年度から同社の代表を務めることになりました」。

マキノハラボは廃校となった旧片浜小学校を活用した「カタショー・ワンラボ」を拠点に、地域創生と「新たな教育・人づくり・まちづくり」に挑戦する企業だ。メンバーは地域活性や交流促進に思いを持つ地域の人材で、現在は10人ほどの職員が活躍している。

主な事業は、①施設活用（活動拠点やオフィスの貸し出し）、②スマート農業、③旧校舎を活用した宿泊・飲食事業、④教育、⑤まちづくり、と幅広い。このなかで浅野さんが主に担当してきたのが、②のスマート農業で、ＩＣＴやロボット技術などを活用して農作業の効率化や生産品の品質管理の最適化を図る。例えば、地域の基幹産業である茶の生産者、民間企業、研究機関、行政を構成員とした共同事業体で行う、有機抹茶の輸出拡大に向けた実証事業だ。マキノハラボは代表機関として企画・調整・運用を担う。

「よく取材を受けるのは、旧校舎を活用した宿泊・飲食事業です。『遊んで泊まれる小学校カタショー』と打ち出し、大人には懐かしい学校給食メニューを提供したり、体育館や天然芝のグラウンドを使ったスポーツやレジャーが楽しめる場を提供しています。今年度は新たにキャンプ事業も開始します」。文化活動やスポーツを通じた国際交流も積極的に推進している。

「人づくりや関係づくりには協力隊での経験が役立っています。相手の立場に立って考える。そのために時間を共にする。誘われたら断らない。いろんな人たちを巻き込むことを大切にしています」。地域の人のつながりが広がっていると浅野さんは感じている。

22年、浅野さんは2社の経営を担うと共に東京農業大学大学院でスマート農業の研究を開始した。「世界中の農家の役に立つような研究を進め、牧之原にもルワンダにも技術を導入できるよう、つなげていきたい」。

今後、マキノハラボは日本国内の廃校活用のモデルとなるべく、地域産業のさらなる活性化を目指す。一方、ヤンビー社は、日本で培った知見や技術をルワンダの農家の人たちに還元し、日本とルワンダをより近づける事業を展開していく。ビジネスを通して人や文化をつなげ、互いにWin-Winの関係が築ける社会へ。挑戦は続く。

浅野さんの歩み

2015年、大学卒業後に協力隊に参加する。

学生時代に世界一周し、東アフリカの文化が自分に合っていると感じました。アフリカの子どもたちの将来の選択肢や価値観が広がる機会をつくりたいと考え、理科教育職種を選びました。

ルワンダのキガリ市の中学校で1年生から3年生の理科教育を担当する。

現地では教員が板書した内容を生徒が書き写す授業が基本でした。そこで私の授業では理科の実験を行い、教科書の内容を実感できるよう心がけました。

2017年にルワンダでヤンビー社を起業する。

ルワンダで培った人脈を生かし、思い切って起業しました。

ヤンビー社を運営する傍ら、ルワンダでのICT技術の実証に携わる。

2019年、マキノハラボに参画する。

スマート農業などの知見をルワンダに還元できるのではないかと考え、日本とルワンダの2拠点で事業をしていくことを決めました。

2022年、引き続き2社の経営を担うと共に、東京農業大学大学院でスマート農業の研究に取り組む。

ICTを活用した農業をルワンダに広めたいと考えました。マキノハラボで得た経験をヤンビー社でも生かして、日本とルワンダをより近づけるような観光業も展開していきたいです。

Text＝久保田裕之　写真提供＝浅野拳史さん

待ってます、あなたを！

各界からのエール

From

国際ソロプチミスト アメリカ 日本東リジョン

東京―山の手

小さなハートプロジェクトより。上野真理恵さん（ガーナ／学校保健／2017年度1次隊）が行った、「The Farm For Schoolプロジェクト　若者・障がい者に就労チャンスを！子どもたちに就学チャンスを！」の様子

2020年2月28日にヒルトン東京（新宿）で行われた支援金贈呈式の様子。左が増澤敏江会長

※小さなハートプロジェクト…JICA海外協力隊員が派遣国で要請とは別の課題を見つけ解決したいとき、現地配属先や協力隊事務局の経費では賄えない活動に助成するプロジェクト。（一社）協力隊を育てる会が窓口となり、国内の各所から支援を募っている。

まずは自分たちが楽しんで、長く続けられる支援を

「国際ソロプチミスト」は2021年に100周年を迎えた世界的な奉仕団体です。世界121の国と地域の約7万2000人の女性会員が、女性と女児の生活と地位を向上させるために活動しており、1984年には国際連合の経済社会理事会の総合協議資格を取得しました。現在、日本では約1万人の会員が活動しています。

私たちの「国際ソロプチミスト アメリカ 日本東リジョン 東京―山の手」は、約25年前に発足しました。当時、国内支援を行うクラブが多いなか、「途上国の女性や子どもたちも支援対象とする、国際的なクラブを目指そう」と話し合い、JICA海外協力隊を対象とした「小さなハートプロジェクト（※）」への支援を決めました。

月に一度の定例会では知恵を出し合い、料亭での食事会や歌舞伎鑑賞、クルージングなど、声をかけられた方たちが参加したくなるような寄付金つきの企画を考え、参加人数や予算の見立てなど、調整が難しいことは多々ありますが、大切にしているのは、企画する私たち自身が「楽しんで取り組むこと」です。支援は長く続けてこそですが、楽しくなければ続かないからです。

現場のJICA海外協力隊員の皆さんも、活動をサポートする私たちも、世界中の女性が笑顔で輝ける社会に向け、これからも楽しみながら活動していきましょう。

増澤敏江さん
国際ソロプチミスト アメリカ 日本東リジョン 東京―山の手 会長
ますざわとしえ ● 40年以上ブティック経営を務めたのち、有名女性実業家から請われて十数年にわたり新潟・燕ハイランドホテルの女将も務めた。本田翠子さんらが発足した同クラブに7年ほど前から加入。2022年に会長に就任。

Text＝ホシカワミナコ（本誌）　写真提供＝協力隊を育てる会、上野真理恵さん

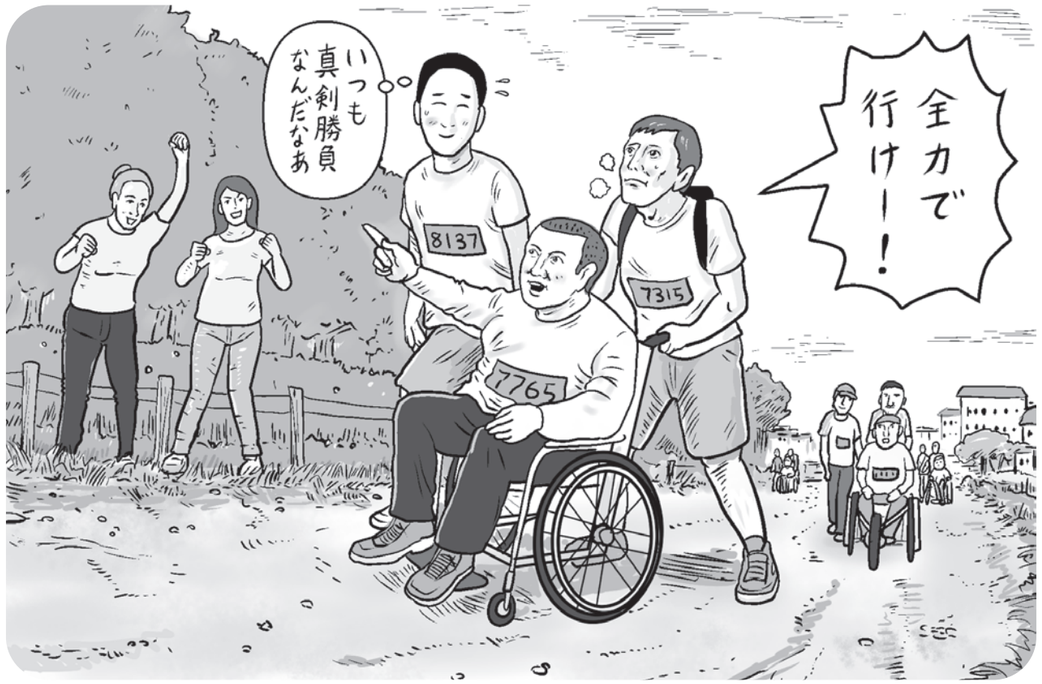
あの日、地球の、あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

セルビア人の負けず嫌いにはかなわない…

バルカン半島の内陸部に位置するセルビア共和国。ここは世界最強のテニスプレイヤー、ジョコビッチ選手を輩出した国である。

セルビアの人たちはスポーツでもゲームでも勝負事に対する熱量がすごい。普段は温厚な彼らも、勝負となると、ケンカが始まるのかと思うほどの熱い思いをぶつけ合う。負けず嫌いなうえに、ボールを受けそこねても「おれがミスしたのはおまえがヘンなパスをするからだ！」と言って、そう簡単には引き下がらない。



Illustration＝牧野良幸　Text＝小原麻子（本誌）

重い障害がある車椅子の男性をサポートしてハーフマラソン大会に参加したときのこと。コースは市街地を少し離れると石だらけのでこぼこ道や坂道が続く。車椅子は競技用ではなく、病院や家庭で使う重いタイプのもの。そんなことは気にもせず、彼は出場して勝つつもりでいる。2人のサポートがついて車椅子を押して走り続け、悪路は車椅子ごと担いで進んだ。彼を気遣って遠慮しがちな僕らに「しっかり押せ」「早く行け！」と檄をとばすのは、彼と周りの応援団。みんなが真剣に勝負に挑み、心からスポーツを楽しんでいるのがわかる素晴らしい大会だった。

結果、勝ちには程遠く、彼の口から「負けたのはサポートの仕方が悪いからだ」の一言も飛び出した…。

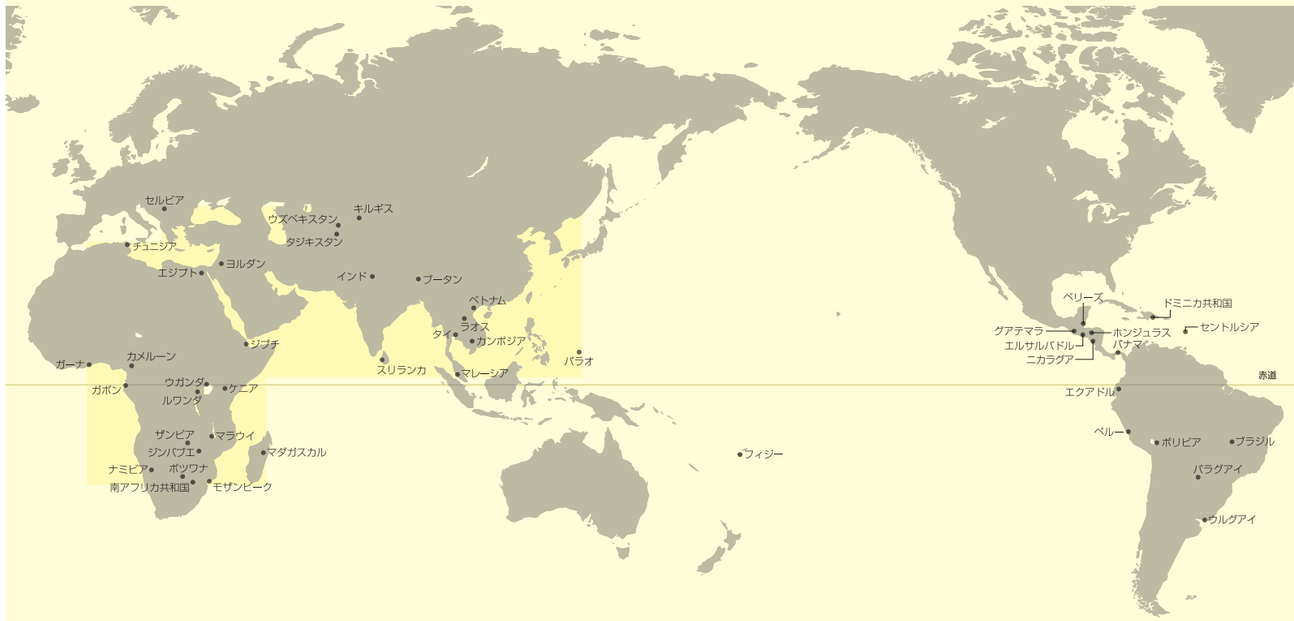
障害の有無にかかわらず、「自分は勝てる」と信じて疑わない心や、頑張れる強さ。そんなセルビアの人たちの心意気に、サポートする側の僕のほうが、いつも叱咤激励を受けていた気がする。

宮城勇也さん
セルビア／障害児・者支援／2018年度3次隊・沖縄県出身

現在の派遣国数
46カ国

JICA海外協力隊派遣現況

（2022年5月末現在）



（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	24	1
ガーナ	19	
ガボン	14	2
カメルーン	13	
ケニア	28	
ザンビア	3	
ジブチ	3	
ジンバブエ	6	
ナミビア	9	
ボツワナ	2	
マダガスカル	20	
マラウイ	19	
南アフリカ共和国	3	1
モザンビーク	7	2
ルワンダ	22	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	3	
ウズベキスタン	3	
カンボジア	20	
キルギス	2	
スリランカ	3	
タイ	10	1
タジキスタン		1
ブータン	8	3
ベトナム	20	
マレーシア	7	4
ラオス	12	4

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
パラオ	5	3
フィジー	1	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	5	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	11	
チュニジア	8	
ヨルダン	11	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ウルグアイ		1		
エクアドル	1			
エルサルバドル	3			
グアテマラ	6	1		
セントルシア	2			
ドミニカ共和国	13		5	
ニカラグア	2	2		
パナマ	1	1		
パラグアイ	11	1		
ブラジル			5	
ベリーズ	1			
ペルー	2	1		
ボリビア	5			
ホンジュラス	1			

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	369 （152／217）	30 （21／9）	10 （2／8）	0	409 （175／234）
累計 （男性／女性）	46,170 （24,468／21,702）	6,585 （5,320／1,265）	1,552 （599／953）	547 （252／295）	54,854 （30,639／24,215）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

秋篠宮皇嗣同妃両殿下が派遣前訓練中のJICA海外協力隊候補者とご接見

JICA海外協力隊2022年度第1次隊として駒ヶ根青年海外協力隊訓練所で訓練中の協力隊候補者69名が、5月20日、JICA市ヶ谷ビルで、秋篠宮皇嗣同妃両殿下からご接見を賜りました。両殿下からひとりひとり激励を賜った隊員候補者は、派遣先での活動への意欲が一層高まったと、気持ちを新たにしていました。今回ご接見を賜った隊員候補者は、JICA海外協力隊として活動と生活を行う上で必要とされる知識の修得や語学力、コミュニケーション能力を高めるため訓練中です。6月9日に訓練を終えた後は、7月以降、アジア、大洋州、中南米、アフリカの開発途上国25ヵ国に順次派遣され、現地の人々と共に生活しながら、教育、保健・医療など様々な分野の課題解決への貢献に向けて、草の根レベルで活動を行う予定です。

ご接見中の隊員候補者の様子

E-book

クロスロードが電子書籍化されました

クロスロードの2021年10月号以降の電子書籍化が始まりました。最新号の電子書籍は、月の半ばくらいから公開予定です。JICA海外協力隊ウェブサイト内の一括ダウンロードPDFと同じく、全ページをご覧いただけます。電子書籍化によりスマートフォンやタブレット端末でも見やすくなりました。利用には楽天会員登録（無料）が必要になります。

電子書籍（楽天Kobo）はこちらから

JICA海外協力隊ウェブサイトにあるクロスロードページにもリンクを張っています

Program

JICA海外協力隊ウェブサイトに「帰国後の日本国内への社会還元」特設ページが開設

JICA海外協力隊として活動した2年間に、開発途上国で培われた、自ら課題を見つけ、周りの人々と協力しながら解決していく力。それは帰国後、日本の課題を解決する力としても生かされています。日本全国で活躍する帰国隊員や、あなたの地域で活躍する先輩隊員をチェックしてみませんか？ 都道府県別に、帰国隊員の活躍が読める「日本も元気にするJICA海外協力隊」（青年海外協力隊事務局版）は、協力隊参加後の進路に悩んだときにも、ヒントになるかもしれません。

PCの方はこちらのサイトへ
https://www.jica.go.jp/volunteer/shakaikangen/index.html

スマートフォンの方にも読みやすいつくりです

クロスロード ［ 2022年7月号 ］

第58巻第6号　通巻678号
発行日　2022（令和4）年7月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株)　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

JICA事務局：クロスロードがついに電子書籍になりました。スマートフォンと共にいつでも持ち歩きが可能になります。活動先で見せることも、停電になったときの長い夜も、いつもあなたのそばにクロスロードが！電子書籍版もぜひご愛読ください。（脇田雄気）

クロスロード編集室：今月号の特集に合わせ、私もリンクトインに登録し、なんでも職種のオンライン座談会に参加させてもらいました。現役隊員の方々の活動や工夫、いま抱える悩みなどを共有させてもらい、刺激を受けました。お互い頑張りましょう！（千川美奈子）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

隊員めし

現地で作った日本食、日本で作る現地めし

ブラジル

まつもと
松本やよいさん

SV/エクアドル/栄養士/2010年度2次隊、日系社会SV/ブラジル/料理/2018年度1次隊・福岡県出身
管理栄養士。日系社会における日本料理の伝承を目指し、ブラジル東北地方で料理講習会などを実施していたが、コロナ禍に一時帰国。実施したメニューをポルトガル語のレシピ集としてまとめるため、カウンターパートと連絡を取り合い、1年かけて制作に取り組みブラジルで製本した。日本では自費出版し、ブラジル食材店や関係自治体で無料配布中。

現地で作った
日本食

「手打ちうどん／肉うどん」

手打ちうどん作りは、イベントでも好評でした。生地を踏みながら皆で歌ったり、手拍子したりと、子どもたちも楽しんで作ってくれました。汁はだしの素がない場合は、ブラジルでは値は張りますが、昆布とかつお節を買って作りました。応用編として、2mm幅にカットすると冷やしソーメンの麺ができます。また、手打ちうどんと同じ材料（塩は１％）に、卵黄とタンサンまたはかん水を加えると、ラーメンの麺ができます（水は少なめにして調整してください）。

●材料（5〜6人分）

手打ちうどん

小麦粉（中力粉）	500g
塩	20g
水	230ml程度
打ち粉（小麦粉か片栗粉）	適量

肉うどん

手打ちうどん	200g
牛肉（細かく切る）	200g
※肉の味つけ調味料	
しょうゆ	大さじ3
酒	大さじ3
砂糖	大さじ1
水	大さじ1.5
千切りしょうが	少々
油	少々
ポーチドエッグorゆで卵	人数分
ネギ	適量
うどんの汁	
水	600ml
だしの素	小さじ1.5
しょうゆ	大さじ1.5
みりん	大さじ1
砂糖	小さじ1
塩	小さじ1/3

●レシピ

麺

❶分量の水に塩を入れて溶かし、塩水を作る
❷ボウルに小麦粉を入れ、中心にくぼみを作り、①の塩水を2〜3回に分けて入れながら、さっくりと混ぜる。生地はパラパラでも徐々にまとまるので、まとまったらビニール袋に入れて10分間休ませる
❸②を2つ折りや4つ折りにして、足で踏んでよくこねる。ビニール袋に生地がつかなくなるまで10〜20分間踏む。15分休ませる
❹③を2〜3回繰り返すと、こしのあるうどんになる（急ぐ場合は1回でも可）
❺袋から取り出し、打ち粉をした台に置き、麺棒で3㎜の厚さに延ばす。2つ折りか3つ折りにして5㎜巾にカットする。その際、生地が重なる部分にはしっかり打ち粉をする。（この作業の間にたっぷりの熱湯と氷を入れた冷水を準備する）
❻熱湯で約10分ゆでる。ザルにあげたあと、冷水に浸し、余分な粉を洗い落とす

肉うどんの具

❼フライパンに油を入れ、牛肉と調味料としょうがを入れて炒める
❽ポーチドエッグ／熱湯に酢を少々入れ、卵を落とし入れて弱火で3分ゆでる。その際、鍋のフチをやさしく箸でかき混ぜると、黄身がきれいに中央にまとまる。ゆで卵／鍋に水と卵を入れて火にかけ、沸騰したら中火で8分程度ゆでる
❾ネギは小口切りにする
❿鍋にうどんの汁の材料を入れて熱する。味見して味を調える
⓫器にうどんを入れ、牛肉、ゆで卵、ネギをトッピングし、⑩の熱々の汁をかける

<松本さんからのアドバイス>
❶で小麦粉は中力粉が手に入らなければ、薄力粉と強力粉を1：1にしても構いません。❷で生地が硬いようなら、水を加えて耳たぶくらいの軟らかさに調整してください。❸で踏むとき、最後はなるべく広げながら踏むとあとの作業がやりやすくなります。⓫で鍋にうどんを入れて煮込みうどんにしてもいいでしょう。

<編集室で再現した感想>
難易度　★★★★★
達成感　★★★★★

手打ちうどんはこね過ぎたのか、思った以上に生地が硬くなってしまい、そのあと薄く延ばすのが大変でした。ゆで時間も倍くらいかかり、出来上がりは太めの麺になってしまいましたが、コシがあり、味や食感は大満足でした。

日本で作る
現地めし

「ポン・デ・ケージョ」

ポン・デ・ケージョは、タピオカ粉にチーズを混ぜて丸めてオーブンで焼いて作るチーズパンです。おやつとしてはもちろん、私は昼食や小腹がすいたときに2〜3個レンジで温めて食べていました。中が軟らかいアツアツのうちに食べるのがお薦めです。

●材料（15〜16個分）

タピオカ粉	120g
油	35ml
水	20〜30mlくらい
牛乳	35ml
塩	1つまみ
卵	1個
おろしチーズ	50g
粉チーズ	6g

●レシピ

❶溶き卵のなかに、塩と牛乳を入れてよく混ぜる
❷ボウルにタピオカ粉とチーズを入れてよく混ぜる。そのなかに油を加える
❸全部の材料を加え、よく混ぜる。水は生地の硬さを見ながら入れていき、耳たぶより少しゆるめの成形できる程度に調整する。よく練り込むほどもちもち感が増す。10分間休ませる
❹1つ25gぐらいの大きさに丸める（ピンポン玉大）。手に油をつけると丸めやすい（15〜16個できる）
❺180℃のオーブンで30分弱焼く

<松本さんからのアドバイス>
ブラジルはチーズの種類が豊富なので、硬めのチーズをおろし器でおろして使いました。日本ではとろけるチーズを使ったり、粉チーズだけでもいいと思います。

<編集室で再現した感想>
難易度　★★★★☆
達成感　★★★★☆

1回目は焼き時間を長くし過ぎてしまい、クラッカーくらいの硬さになってしまいました。2回目は焼き時間を短くして状態を見ながら焼いたところ、外はカリッ、中はモチモチになりました。個人的にはチーズを細かくして生地と一体化させるよりは、多少形を残して生地に混ぜたほうが好きでした。見た目以上に満腹感があります。

レシピ・写真提供＝松本やよいさん　Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝千川 修

コシがあってツルツル
「手打ちうどん／肉うどん」

外はカリッ、中はフワッ
「ポン・デ・ケージョ」

肉うどんとお好み焼きの試食会の様子。
お好み焼きは日系社会では昔から親しまれている料理

ブラジルではパスタマシンがある家庭もあり、
それを借りてうどん作りに活用することも

手打ちうどん作りでは、それぞれ自分の生地を
丹念に踏んだ

クロスロード 2022年7月号
2022年7月1日発行（毎月1回1日発行）第58巻第6号 通巻678号
編集・発行 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

バニラビーンズの木と小瀬さん（写真右）。バニラの契約農家の男性（写真左）とは長年の付き合いだ

＼ウチのこだわり／

OB・OGショップ
―海外編―

プロに愛される上質で豊かな香りのパプアニューギニア産天然バニラ

小瀬一徳さんは20代の3年間、パプアニューギニアで製材隊員として活動した。現地でカウンターパートだった男性は、小瀬さんの父親と同年代で、まるで息子のように小瀬さんをかわいがってくれ、家族同様のつき合いがあった。帰国後、小瀬さんは大学で学び、商社に勤務したが、その間ずっとパプアニューギニアへの思いは変わらなかった。「お世話になった国の人々とつながりを保ち続けたい、恩返ししたいという一心でした」（小瀬さん）。

そして始めたのがパプアニューギニア産カカオ豆などの輸入販売業だ。なかでもメインの商品は、洋菓子作りに欠かせない甘い香りのバニラビーンズ。1990年ごろから栽培が始まったパプアニューギニアは産地としては後発だが、肥沃（ひよく）な大地と熱帯の気候がバニラ栽培に適しており、ワインやショコラを思わせる芳醇（ほうじゅん）な香りを放つ。小瀬さんが扱うバニラは無農薬・無化学肥料栽培で小規模の個人農家が生産している。「小規模農家から集めるメリットは、品質に目が行き届き、完熟状態で収穫できることです」。バナナやカカオもそうだが、完熟した状態で収穫するほうが風味や香りが断然強い。さらに、安価な化学合成のバニラ香料も多く出回っているが、天然バニラの数倍香りが強く甘ったるさがあり、天然物には到底及ばないという。「主なお客様はプロのシェフやパティシエです。繰り返し注文し、黙々と使い続けてくださるのが何よりも嬉しいことです」。

コロナ禍でもテイクアウト需要によりバニラやカカオ豆の売り上げは順調だ。「近いうちにパプアニューギニアに行き、商品の仕入れなどで還元したいですね」。

バニラビーンズはさや状の果実だが、収穫したままの状態ではほとんど香りがない。天日干し、発酵、熟成の工程を経たバニラのさやを加熱することで香りが出る。収穫時は緑色のさやが光沢のある漆黒へと変化する。

SHOP DATA

Vanilla House（バニラハウス）

経営者：小瀬一徳さん
（パプアニューギニア／製材／1993年度2次隊・奈良県出身）
ウェブショップ
http://www.vanilla-house.com

Text＝村重真紀　写真提供＝バニラハウス

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。